

令和2年度 文部科学省指定研究

「多様性への対応に関する調査研究事業」

報告書

社会自立に向けた学習指導法の確立

～定時制課程単位制の取組より～

研究指定校：奈良県立大和中央高等学校定時制課程



奈良県教育委員会

目 次

1	はじめに	2
2	調査研究校について	3
	(1) 奈良県立大和中央高等学校の特徴	
	(2) 生徒の実態	
3	研究内容	10
	(1) 研究のねらい	
	(2) 調査研究の概要	
4	先行実施（令和元年度の取組）	14
	(1) 校内体制の整備	
	(2) 「ICTを活用した学習支援」	
	(3) 「通級による指導」	
5	研究実践（令和2年度の取組）	22
	(1) 「ICTを活用した学習支援」	
	(2) 「通級による指導」	
6	今後に向けての課題	40
7	おわりに	42

高等学校における「通級による指導」手引書

1 はじめに

平成 30 年度に高等学校における「通級による指導」が始まってから 3 年が経つ。高等学校において「通級による指導」が制度化されたことで、小中学校からの切れ目のない特別支援教育体制が整備されるとともに、従前から行われてきた特別支援教育の枠組みが拡充され、個に応じた指導・支援が一層充実されることとなった。

個に応じた指導の充実について、平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領は、生徒の多様性について言及した上で、多様なニーズをもつ生徒に対する具体的な指導法を工夫・改善すること、組織として校内支援体制を充実すること、また、カリキュラム・マネジメントの確立による継続的な支援体制を構築することを求めている。この点について、現在、高等学校における「多様な教育的ニーズ」への対応は、政策レベルにおいて整備が進む一方で、運用レベルにおける制度づくりや指導法の確立・普及については、日々最適な方策を模索しているところである。

このような状況の下、本研究では、文部科学省委託事業である「令和 2 年度多様性への対応に関する調査研究事業」の事業目的に基づき、定時制課程に在籍する生徒の「社会自立」を実現することを目標として設定し、その手立てとして「ICT機器の活用」及び「通級による指導」の 2 つの手法に取り組むこととした。

本報告書は、同事業の実践校である奈良県立大和中央高等学校における研究成果をとりまとめたものである。

2 調査研究校について

(1) 奈良県立大和中央高等学校の特徴

本校は奈良県の中央部に位置する多部制単位制高等学校である。「学びたいときに学べる学校」・「学ぶ必要が生じたときに学べる学校」として平成 20 年に開校し、13 年目を迎える。定時制課程であり、午前の部(I部)、昼間の部(II部)、夜間の部(III部)の3部を設置している。また、通信制課程を併設している。

単位制高校であるため、学年在留システム(留年)がなく、他校で修得した単位を読み替えて継続できることなどが特長であり、生徒は個々のライフスタイルに合わせ、無理のないペースで自らの能力を伸ばしている。開校当初より、多様なニーズや要望に応え、生徒の多様な生活スタイルに合わせた幅広い履修形態を有している。

時 限	時 間	I 部	II 部	III 部
1 時限	9 : 00~9 : 45	I 部 学習時間帯	他部履修 可能時間帯	/
2 時限	9 : 50~10 : 35			
3 時限	10 : 50~11 : 35		II 部 学習時間帯	
4 時限	11 : 40~12 : 25			
5 時限	13 : 10~13 : 55	他部履修 可能時間帯		
6 時限	14 : 00~14 : 45			
7 時限	15 : 00~15 : 45	他部履修 可能時間帯		
8 時限	15 : 50~16 : 35			
9 時限	17 : 35~18 : 20	/	/	III 部 学習時間帯
10 時限	18 : 25~19 : 10			
11 時限	19 : 25~20 : 10			
12 時限	20 : 15~21 : 00			

表1 本校の標準的な学習時間帯

学科	普通科		普通科				備考	
			1	2	3・4	計		
教科	科目	単位数	年次					
各 学 科 に 共 通 す る 各 教 科 ・ 科 目	国語	国語総合	4	4			4・6・ 8・10 12・14 16・18 20・22	国語総合は必修。現代文発展の履修は、現代文Bの修得後に行う。古典発展の履修は、古典Bの修得後に行う。
		国語表現	3			2		
		現代文B	4			4		
		古典B	4			4		
		※現代文発展	2			2		
		※古典発展	2			2		
		※実用国語	2			2		
	※国語セミナー	2			2			
	地理 歴史	世界史A	2		2		4・6 8・10 12・14 16	世界史A、世界史Bから1科目必修。日本史A、日本史B、地理Aから1科目必修。
		世界史B	4		4			
		日本史A	2		2			
		日本史B	4		4			
		地理A	2		2			
	※総合地誌	2		2				
	公民	現代社会	2		2		2	現代社会は必修。
	数学	数学Ⅰ	3	2			2・4・6 8・10・12 14・16・18 20・22・24	数学Ⅰは必修。数学補充、数学Ⅱの履修は、数学Ⅰの履修後に行う。数学Ⅲの履修は、数学Ⅱの履修後に行う。
		数学Ⅱ	4		4			
		数学Ⅲ	5		6			
		数学A	2		2			
		数学B	2		2			
		数学活用	2		2			
		※数学補充	2		2			
		※数学入門	2		2			
	※数学セミナー	2		2				
	理科	科学と人間生活	2		2		4・6 8・10 12・14 16・18 20・22	科学と人間生活と基礎を付した1科目を含む2科目、もしくは基礎を付した3科目が必修。化学、生物の履修は、それぞれの基礎を付した科目の履修後に行う。
		物理基礎	2		2			
		化学基礎	2		2			
		化学	4		4			
		生物基礎	2		2			
		生物	4		4			
		地学基礎	2		2			
		※化学基礎探究	2		2			
	※生物基礎探究	2		2				
	保健 体育	体育	7~8	2	2	ア3 イ2	9・10・11	体育は7単位必修。保健は必修で2年次までに履修。3年修業生はア、4年修業生はイを選択する。
		保健	2	2		イ1		
		※ニュースポーツ	1			1		
※障害者スポーツ		1			1			
芸術	音楽Ⅰ	2		} 2		2	音楽Ⅰ、美術Ⅰまたは書道Ⅰから1科目必修。	
	美術Ⅰ	2						
	書道Ⅰ	2						
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	2			2・4・6 8・10 12・14 16・18 20	コミュニケーション英語Ⅰは必修。	
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4				
	コミュニケーション英語Ⅲ	4		4				
	英語表現Ⅰ	2		2				
	英語表現Ⅱ	4		4				
	※英語セミナー	2		2				
	※カルチャースタディ	2		2				
家庭 情報	家庭基礎	2	2			2	家庭基礎は必修。	
社会と情報	2	2				2	社会と情報は必修。	
普通教科・科目小計			18~28		41~54	70~83		
※ よ し て 専 門 学 科 に お い て 履 修 さ れ る 専 門 ・ 科 目	商業	ビジネス基礎	2~4		2		0・2 4・6 8・10	簿記発展の履修は、簿記の履修後に行う。
		広告と販売促進	2~4		2			
		簿記	2~6		2			
		情報処理	2~6		2			
	※簿記発展	2		2				
	家庭	消費生活	2~4		2		0・2・4 6・8・10 12	
		子どもの発達と保育	2~6		2			
		リビングデザイン	2~8		2			
		ファッション造形基礎	2~6		2			
		フードデザイン	2~6		2			
※いきいきライフ	2		2					
☆郷土	※奈良タイム	1		1		1	奈良TIMEとして必修。	
専門教科・科目小計			0~4		1~23	1~23		
各教科・科目計			18~28		39~56	67~84		
総合			1	1	1	1	3・4	探究は3単位以上必修。
自立活動領域	社会生活Ⅰ			0・2		0・2 4・6	自立活動領域は、学校教育法施行規則第5条に基づき設定する障害者に応じた特別の指導である。	
	社会生活Ⅱ			0・2				
	ライフマネジメント			0・2				
各教科・科目等計			19~29		45~61	74~90		
特別活動	ホームルーム活動		1	1	1	1	3・4	
合計			20~30		47~63	77~93		
(注)			1年間に3年修業生は29単位、4年修業生は19単位を上限に履修する。					

☆印は学校設定教科 ※印は学校設定科目

表2 教育課程表(令和2年度入学生用)

(2) 生徒の実態

ア 「多様な教育的ニーズ」を必要とする生徒

本校は開校当初より他の高等学校を中途退学し、学習や学校生活のやり直しの場として選択し、入学する生徒が多数いた。初期は、国公立大学や私立難関大学に現役で合格するなど、高い学力を有する生徒も在籍していた。大学等への進学に意欲をもつ生徒には、課題発展的な授業や補習を行うことで進路保障の手立てを行うことにより、進学にも一定の実績をあげていた。

しかし近年は、小・中学校で不登校を経験した生徒の入学が増えている。令和2年度新入学生徒の中学3年生での不登校率は63%であった。中学3年生までの不登校経験率はもう少し高くなると推測される。彼らの中には、中学校の3年間で1日も登校できなかった生徒や、小学校低学年から継続した不登校傾向の生徒もいる。そのような生徒の入学増加により、全体としての学力低下が顕著となってきた。また、学習意欲が低かったり、授業になれていない生徒が多かったりする中で、集団一斉授業も難しくなってきた。友人関係を築く中で、人間関係の距離感や友人関係の成り立ちが分からないことから起こる、生徒同士のトラブルも増えてきている。

一方、療育手帳や精神障害者福祉手帳を所有する生徒の入学も増えている。特別支援学校に在籍していた生徒も入学しており、教員や友人の支えと共に学校生活を送っている。令和2年度は車椅子を利用し、介護を要する生徒が2名在籍している。2名の生徒には個々に特別支援教育支援員が県教育委員会から配置され、学校生活や授業の補助などの支援を行っている。2名に対し、個別アプローチと学習支援により、卒業・就労に向けての取組を進めているところである。ただ、手帳を持つ生徒に対しては、入学当初から教職員間で情報共有し、支援の方法等についても検討することができるが、手帳の所有を明らかにしたくない生徒や課題や問題は見えているが顕著でない生徒には、よりよい指導・支援方法の見極めなどに時間が費やされ、支援が遅れる傾向にある。こうしたケースについては、保護者の同意を得た上で、保護者や出身中学校等から早急に情報を収集し支援体制を築く仕組みが必要であり、校内特別支援委員会中心に進めている。

また、外国にルーツをもつ生徒の入学も増加傾向にあり、その生徒への指導・支援では、言語や文化の違い等から保護者との連携が課題となる。県教育委員会の母語通訳支援員制度等を利用し、保護者とのコミュニケーションを図っているが、事前の申請が必要であり、緊急に対応が必要なケースでは苦慮することも多くなっている。

本校に在籍する生徒の実態から、外国にルーツをもつ生徒だけでなく、家庭との密なる連携は欠かすことのできない重要事項であるが、家庭との関係について、年々連携が取りづらい傾向にある。保護者の中には学校への協力姿勢がなく、同じ目的に向かった指導体制が取れなかったり、学校教育への興味・関心が薄い保護者であったり、子どものこと以外に気持ちが向いてしまっていたりしている。また、協力的であったにもかかわらず、急に学校からの連絡を拒否したり、連絡がとれない状況になったりすることもある。こうした背景には保護者の生活困難や子どもへの興味・関心に気持ちを向ける余裕がなくなっていることが考えられる。こうした状況で、家庭への経済的支援のため、アルバイトに力を入れ、学校生活に支障が生じた生徒もいた。今後もスクールソーシャルワーカー等と連携を図りながら家庭や地域、福祉機関との連携をより密にし、継続的に支援を続ける必要がある。

また、本校は制服の規程がなく、髪型等についても自由度の高い学校である。ここ数年、LGBT(性の多様性アイデンティティ)の特性を有する生徒が入学をしてきている。しかし、入学後、更衣や身体測定等の自身の性を意識せざるを得ない場面が生じ、個別の対応を講じてはいるが、本人の不安の払拭に至らず、悩みを抱き続け、登校できづらくなった生徒がいた。

このような様々な特徴や特性を持ち合わせた本校の生徒には、多様な教育的課題やニーズを抱えて

いると考える。そのため、教育的な支援や配慮により、学校生活や学習活動に困難や苦痛を感じているのであれば、克服する方法や制度を構築しなければならない。また、不登校を経験している本校生徒の行動や内面の特徴には、自分自身を否定したり、何事に対しても自信をなくし、消極的な行動となったり、衝動的もしくは攻撃的になったりするところがある。自尊感情が低く、自分を好きになれないことがあると話す生徒もいる。そのような内面形成に至った原因は様々であろうが、不登校を経験したことが多少はあると考える。

本校は、こうした経験を有する生徒が、様々なことを再構築し、社会生活を送る上での心と人間関係の基盤づくりを行うための場であると考えている。

イ 教育相談

学習面だけでなく、内面や精神的な側面から多様な教育的ニーズを抱える生徒が多い本校では、スクールカウンセラーが週に3日、スクールソーシャルワーカーが月に3日程度勤務している。教育的ニーズの中でも、心理的支援を必要とする生徒が多いことが理由である。スクールカウンセラーは、本校のような多様な教育的ニーズを抱える生徒が多い県内の学校で勤務されている。スクールカウンセラーは、生徒支援や生徒への対処法を本人に提示したり、担任にカウンセリング内容を伝えたりすると、その生徒が学習活動を継続できるケースが増えてきている。

表3は、令和元年度の本校のスクールカウンセラーによる教育相談の件数である。修業年数が経過する毎に数字は大きくなる。定時制課程は3部を合わせた人数である。

	1年次	2年次	3年次	4年次以降	計
定時制課程	24/151名	14/125名	5/101名	1/50名	44/427名
通信制課程	3/95名	0/78名	2/86名	0/25名	5/284名

表3 令和元年度教育相談数

スクールカウンセラーによると、教育相談(カウンセリング)件数は年々増えてきており、内容も「心身の健康・保健」が圧倒的に多い。「心身の健康・保健」に関わる相談が201回(平成30年度より44回増加)と昨年に続き最も多く、次いで「友人関係等の学校生活」が36回(平成30年度より18回増加)、「家庭環境」も36回(平成30年度より12回減少)、「不登校」が31回(平成30年度より29回減少)であった。

「心身の健康・保健」では、抑うつ傾向や強迫的な考えに悩まされるなどの精神症状が疑われる生徒、自傷行為に至る生徒、いじめや虐待などの心的外傷体験から心身の不調を訴える生徒、発達の課題を抱え、自己肯定感が著しく低下し、過度のストレスを感じている生徒などの相談が中心となっている。このような生徒は、自己肯定感や他人と適切な関係を築く力が十分に育たないまま学校生活で失敗を繰り返すことで、更に自己肯定感が低下する悪循環となり、心身の不調に至っていると思われる。「友人関係等の学校生活」では、コミュニケーションスキルや自尊感情がうまく育っておらず、対人関係を回避しながら学校生活を送る生徒や、親密な対人関係を求める中でトラブルや傷つきを体験する生徒からの相談が目立っている。対人関係上の問題には、発達上の課題や人との関わりの中で生じた心的外傷体験、家族における人間関係(過干渉、無関心など)が大きく反映されているようだとの報告を受けた。

相談内容	生徒										保護者										教員	総計		
	定時制 I部 II部 III部					通信制					生徒計	定時制 I部 II部 III部					通信制						保護者計	
	1年次	2年次	3年次	4年次以降	計	1年次	2年次	3年次	4年次以降	計		1年次	2年次	3年次	4年次以降	計	1年次	2年次	3年次	4年次以降				計
① 不登校	2				2	2		6	8	10	5				5	6				6	11	10	31	
② いじめ問題	1				1				0	1					0					0	0	1	2	
③ 暴力行為					0				0	0					0					0	0		0	
④ 児童虐待					0				0	0					0					0	0		0	
⑤ 友人関係等の学校生活	22				22				0	22	5				5					0	5	9	36	
⑥ 非行・不良行為	4				4				0	4					0					0	0	4	8	
⑦ 家庭環境		17	2		19				0	19		11			11					0	11	6	36	
⑧ 教員との関係					0				0	0					0					0	0		0	
⑨ 心身の健康・保健	61	33	11	1	106			1	1	107	16	1			17					0	17	77	201	
⑩ 学業・進路	1				1				0	1					0					0	0	1	2	
⑪ 発達の問題等					0	1			1	1					0	2				2	2	2	5	
⑫ その他	4		3		7				0	7	2				2					0	2	13	22	
計	95	50	16	1	162	3	0	7	0	10	172	28	12	0	0	40	8	0	0	0	8	48	123	343

表4 令和元年度 本校における教育相談回数

ストレスを抱え、ストレスコントロールの難しい生徒が、本校に多いことは前述の通りである。令和元年5月実施したストレスアンケート(『ストレス反応 20』(永浦・山口・富永、2013)を使用)に回答した全生徒のうち、ストレス得点が「とても高い」範囲にあった生徒の割合は54.8%で、「高い」範囲にあった生徒を含めると72.9%となり、多くの生徒が高いストレスを抱えていることが判明した。また、年次の進行(年齢が高くなる)に伴い、高いストレスを抱える生徒が増加していることが分かった。ストレス反応についても本校の生徒では、「悲しみ」や「生活不調」として、出現しやすいことも分かった。

令和元年5月実施

部	1年次			2年次			3年次			5年次			ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の割合
	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「高い」「とても高い」生徒の割合	
I部	36	58	62.1%	37	55	67.3%	34	43	79.1%	5	6	83.3%	69.1%
II部	34	57	59.6%	33	38	86.8%	19	21	90.5%	18	19	94.7%	77.0%
III部	3	3	100.0%	2	2	100.0%	4	4	100.0%	1	4	25.0%	76.9%
計	73	118	61.9%	72	95	75.8%	57	68	83.8%	24	29	82.8%	72.9%

令和元年6月実施

部	1年次			2年次			3年次			5年次			ストレス得点が「とても高い」生徒の割合
	ストレス得点が「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「とても高い」生徒の割合	ストレス得点が「とても高い」生徒の数	アンケートに回答した生徒の数	ストレス得点が「とても高い」生徒の割合	
I部	27	58	46.6%	28	55	50.9%	25	43	58.1%	5	6	83.3%	52.5%
II部	25	57	43.9%	25	38	65.8%	14	21	66.7%	11	19	57.9%	55.6%
III部	3	3	100.0%	2	2	100.0%	4	4	100.0%	1	4	25.0%	76.9%
計	55	118	46.6%	55	95	57.9%	43	68	63.2%	17	29	58.6%	54.8%

表5 アンケートの結果 ストレス得点が「高い」(上表)「とても高い」(下表)生徒の割合

ストレスアンケートにおける各ストレス内容得点の平均値

令和元年5月実施

部	1年次				2年次				3年次				5年次				各部平均			
	緊張	怒り	悲しみ	生活不調	緊張	怒り	悲しみ	生活不調	緊張	怒り	悲しみ	生活不調	緊張	怒り	悲しみ	生活不調	緊張	怒り	悲しみ	生活不調
I部	35	45	39	53	26	48	37	59	34	55	44	57	35	65	37	50	32	50	40	56
II部	34	45	42	58	39	58	47	70	46	62	56	74	37	56	46	67	38	53	46	65
III部	93	40	90	90	50	90	20	100	78	80	80	105	08	40	20	50	55	60	55	84
各年次平均	36	45	41	56	32	53	41	64	40	59	50	65	32	56	40	61	学校全体の平均			
																	35	52	43	61

※ 各ストレス内容得点の目安

程度	割合	緊張	怒り	悲しみ	生活不調
とても低い	0～20%	0	0	0	0
低い	21～40%	0	1	0	1～2
普通	41～60%	1	2～3	1	3
高い	61～80%	2～3	4～6	2～3	4～5
とても高い	81～100%	4～	7～	4～	6～

表6 アンケート結果 内容得点の平均値と内容得点の目安

スクールカウンセラーは、適度なストレスは人が成長し、豊かな生活を送るために必要なもので、ストレスを感じなければよいとは一概に言えないし、適度なストレスとそれらをコントロールできる技術や解消法が重要であると指摘している。ストレスアンケートにおける「悲しみ」の得点の高さから、孤独感や自己否定、「生活不調」については、意欲の減退や不集中、それに伴う体調不良を引き起こす生徒達の現状からもうかがえた。

本校への入学を機に、一度は不登校を克服したものの、年次進行とともに潜伏していた問題が顕在化する生徒もいる。このような生徒からは、頑張っ学校生活を送ろうと努力するものの、本人の特性や家庭の環境など根本的な問題が改善されていないため、疲れやストレスが蓄積されやすく、また新たに発生した問題に対応できないことから力尽きてしまうようである。また、見た目には支援の必要が感じられず、周囲が気づきにくい発達上の課題を持つ生徒が多く在籍することが、スクールカウンセラーからも指摘された。まさに、本校の生徒における教育的ニーズや課題と一致すると言える。

スクールカウンセラーは、ストレスの現状を改善するには、2つのアプローチからの実践が必要としている。まず1つは、生徒が直面している問題(ストレス)に対して支援を行うことである。問題自体が改善に向かうこと、そして「助けてもらえる」という感覚を持つことは、ストレスの緩和に大きな効果がある。生徒が周囲の助けを得て、支えられながらも自分の問題を解決することは、自尊心や自己肯定感を育むことにつながる。2つ目は、生徒が心身の不調や問題行動などのストレス反応を示したとき、その場で応急的にストレスの緩和を図ることである。このような状況下では、生徒から思いや感情を言葉として出させること(言語化)が大切である。言語化はストレスマネジメントにおける重要な手法の1つであり、気持ちの整理を進めるとともに、怒りや悲しみなどネガティブな感情の放出を助ける。

ウ 進路状況

本校の進路状況は、その時々状況も加わり年々変化している。開校当初、半数に近い生徒が進学をしており、2割強の生徒が就職をしていた。文部科学省による平成30年度高等学校卒業生の進路調査では、全体の54.7%が大学等、22.0%が専門学校などへ進学し、17.5%が就職をしている。本校の進路状況と文部科学省の調査結果とは類似していた。しかし、四年制大学や短期大学への進学者が減少する傾向が続き、就職する生徒と逆転した。平成30年度の卒業生では、8.4%が大学等、22.2%が専門学校へ進学をし、44.4%が就職をした。また、開校当初より進学や就職ではなく、「その他」の生徒が多いのが本校の特徴でもあった。高校を卒業することのみを目的に入学をしているため、進路や就職でなく、家事手伝い・定職でないパートタイムやアルバイト・求職中の割合が高くなる。

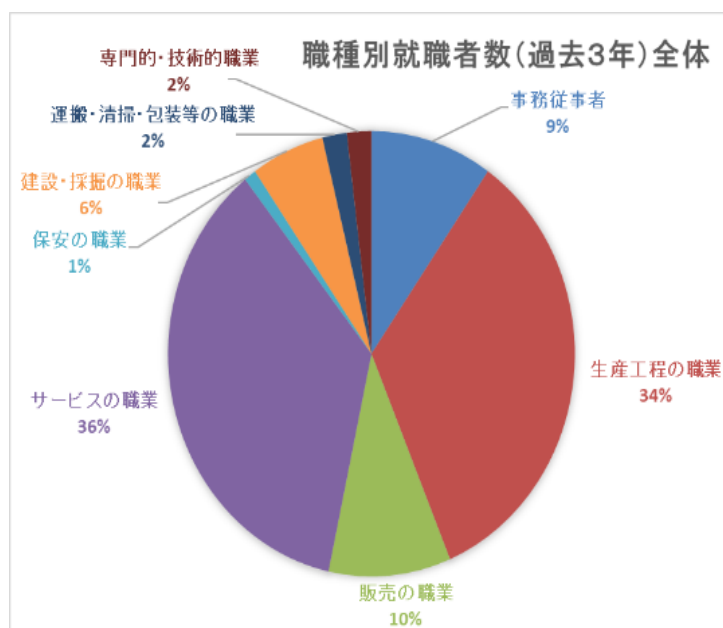
	四年制大学	短期大学	専門学校	進学	県内	県外	公務	縁故・継続	就職	その他
22年度	13.0%	16.9%	18.2%	48.1%	14.3%	3.9%	1.3%	3.9%	23.4%	28.6%
23年度	9.3%	5.8%	18.6%	33.7%	7.0%	0.0%	0.0%	15.1%	22.1%	44.2%
24年度	9.3%	4.7%	23.3%	37.2%	5.8%	3.5%	0.0%	8.1%	17.4%	45.3%
25年度	13.1%	1.9%	15.0%	29.9%	9.3%	8.4%	1.9%	5.6%	25.2%	44.9%
26年度	9.8%	4.9%	24.4%	39.0%	15.9%	4.9%	0.0%	7.3%	28.0%	32.9%
27年度	5.1%	6.1%	19.4%	30.6%	16.3%	4.1%	0.0%	26.5%	46.9%	22.4%
28年度	6.1%	2.4%	24.4%	32.9%	25.6%	3.7%	0.0%	18.3%	47.6%	19.5%
29年度	6.5%	1.3%	18.2%	26.0%	19.5%	19.5%	2.6%	9.1%	50.6%	23.4%
30年度	4.2%	4.2%	22.2%	30.6%	20.8%	16.7%	0.0%	6.9%	44.4%	25.0%

表7 本校の進路状況の推移と職種別就職者数(下：円グラフ)

進学先に関しては、地元奈良県内の大学や専門学校を希望し、進学先とすることが多い。入学選考試験も、一般試験まで学習を続け挑むのではなく、指定校推薦やAO入試を利用し、早々に合格を手にする生徒が多い。

就職先の業種では、工場などの生産工程の職業を希望する生徒が多い。理由は、物作りが好きである他に、他人とコミュニケーションをとることに苦手意識をもっているため、工場などの業種は人気である。また、近年では、ICT機器に長けている生徒も多く、携帯ショップの販売員を希望していたり、家族などに従事者がいたり、生徒自身も利用して良い思い出があったりするなどの理由から、介護施設などの支援員やワーカーとしての介護職を希望する生徒も増えている。

ただ、生徒の進路は希望通りであったかとなると、自身の課題であったり、実力が伴わなかったりとしている。平成30年度では、進学希望者に対する合格率は76.2%（平成29年度90.5%）であった。就職希望者は、希望した職種ではない生徒がいるものの、内定率68.3%（平成29年度64.7%）であった。



3 研究内容

(1) 研究のねらい

本校では、不登校を経験した生徒が過半数を超える他、学校生活や学習活動に困難を抱える生徒が数多く入学するようになった。また、特別支援や教育的配慮を要する生徒、外国にルーツをもつ生徒、貧困による教育的課題を抱える生徒なども増えてきている。このように多様な教育的ニーズや課題、それに対応する支援が必須となっている。本研究では、多様な教育課題や教育的ニーズを抱える生徒に対して、「ICT機器を活用した学習支援」及び「通級による指導」の2つの研究手法により、自信や自己肯定感を培い、自尊感情を高めることで、学習面や学校生活場面だけでなく、社会自立や生きる力を育むことに至る学習指導法の確立をねらいとする。

(2) 調査研究の概要

ア 研究手法1 「ICT機器を活用した学習支援」

「ICT機器を活用した学習支援」では、基礎学力の定着を1人1台のタブレット端末とモバイル学習教材の活用によって行う。モバイル学習教材により、小学校4年生から中学校3年生まで「数学(算数)」と「漢字」の内容を、生徒の学習到達度に合わせた教材を提供し指導を行う。対象は1年次とし、「国語総合(週4時間通年、4単位)」と「数学I(週4時間半期、2単位)」の授業を中心に、教科担当者が10分程度、生徒個人に合う教材を取り組ませる。一斉授業の中で、生徒は自身の到達度に合わせた個別学習として取り組むことができる。教科担当者と支援員は机間巡視による直接指導や、管理者ページ機能を活用し生徒の到達度の確認、つまり生徒への支援を行うとともに、生徒からの質問をメールで受け付けるなどの間接指導も行う。また、生徒は、「総合的な探究の時間」を活用し、基礎学力がどの程度身に付いたかの「ふり返し」と、これからの学習に対する「目標と課題」を設定する。

(ア) タブレット端末(ICT機器)とモバイル学習教材の導入と活用の経緯

先に行われている研究には、学習の成果・成績向上は、自信と自己肯定感の構築との相関関係にあることが示されていた。自己肯定感を、高校生が「自分を無条件に信頼できる力」とするのであれば、客観的な価値や評価、そして、生徒自身がその価値を評価・体感できることこそが、自分を信頼できる力につながると考える。

本校の生徒は、人間関係を築くことが苦手であり、学校や教員に対し、拒否感・抵抗感や苦手意識をもっている者が多い。生徒への聞き取りの中でも、学校や教員に対し不信感を持っていた生徒やその感情を払拭できない生徒が多いことが分かっている。このような生徒が、主体的に学習に向かうようにさせるためには、学習することや、学習環境に対して安心感を持てること、また、学習の成果を客観的に自分で評価できるツールが必要であると考え、本研究においては、1人1台のタブレット端末(ICT機器)とモバイル学習教材を導入することとした。また、これらのツールを使用することで期待できる効果を次のとおり想定した。

- ・生徒個人のレベルに合う個別の課題を反復的に行うことができる。
- ・同じ空間(教室)で同一の環境でいながら、周りの友人にどの段階をしているのかを知られることもなく取り組むことができる。
- ・日常的にゲームをしている感覚から、失敗しても何度でもリセットができるという学習への安心感が生まれる。

- ・周囲に気づかれず精神的に落ち着いて訂正ができるため、誤りを受け入れやすい。
- ・タブレット端末と対面での学習を組み合わせることで、教員への抵抗感が薄れ、安心して学習に臨める。

(イ) モバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ」導入の経緯

モバイル学習教材を活用した実践報告は、小学校や中学校で多くみられるようになった。令和元年6月に出された文部科学省「新時代の学びを支える先端技術活用促進方策(最終まとめ)」の中でも、先端技術、いわゆるICTを活用した新時代の教育の方向性が示されている。その中には、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を創造できる資質・能力の育成が掲げられており、さらには、「公正に個別最適化された学び～誰一人取り残すことなく子どもの力を最大限引き出す学び～」として、子どもの多様化に正面から向き合うことが重要になることも明示されている。あらゆる子どもが誰一人取り残されることなく未来の社会で羽ばたくには、その前提として基礎学力を確実に身に付けることも明示されている。その方法として、個々の子どもの状況に応じた問題を提供するAIを活用したドリル教材等の先端技術を活用することや、ICTは、繰り返しが必要な知識・技能の習得度に関して効果的な学びであることも記されている。また、近年、大学などの高等教育機関においてもモバイル学習教材を活用した基礎学力の定着や向上の実践が注目されつつある。大学生の学力底上げに個別の学力に相当するモバイル学習教材が教育力を注いでいると掲載されていた新聞記事を目にした。その実施に応用されたのが、本研究で導入したモバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ」であった。

本校の生徒実態や学習の様子等から、高校生でもふり返りとして、小学校や中学校の学習内容を学ぶことができること、個々の生徒に応じた問題をドリル形式で繰り返し行えること、学習すべき箇所を教員から指摘できる

こと、個々のペースで学べ、他生徒と競う必要がない等、検討した結果、モバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ」を本研究の検証として導入することとした。

図1 モバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ」の選択画面



イ 研究手法2 「通級による指導」

「通級による指導」に関する研究では、学習や社会的適応に困難を抱える生徒が社会でよりよく活動できる力を育むことを目指した学習内容を検討する。障害等による学習面や生活面・対人関係のつまずきに加えこれまでの失敗経験や苦手意識の積み重ねからの自尊感情の低下や意欲の乏しが見られる生徒が少なくない。学級において、担任や各教科担当が支援をしながら自尊感情を高め将来に向けた希望がもてるように指導している。しかし、いざ卒業を目前にすると不安な気持ちが高まり登校しづらくなったり、就職試験や進学試験、さらには説明会や新入社員の研修に行けなかったりするケースがでてきた。卒業後、生徒が学校生活や卒業後の自立と社会参加をスムーズかつ意欲的に行えることが必要であると考え、その指導・支援を行い、効果的な校内体制を整備するとともに、生徒の自己理解・自尊感情の向上、不注意や衝動性に対する指導や支援のあり方についての研究を進める。

(ア) 「通級による指導」を開始した経緯

奈良県内の中学校特別支援学級に在籍し高等学校等への進学した者の数及び割合は、平成27年度94名(37.5%)、平成28年度101名(40.1%)、平成29年度139名(53.1%)、平成30年度176名(61.5%)と、年々増加していることから、高等学校においても特別支援教育を充実させていかなければならないと考えられる。そこで、小・中学校等からの学びの連続性を一層確保しつつ、生徒一人ひとりの教育的ニーズに即した適切な指導及び必要な支援を提供する観点から、高等学校においても障害に応じた特別の指導を行えるようにするため、「通級による指導」に関する研究を進めることとなった。

(イ) 対象生徒

本校では、「通級による指導」の対象は、2年次以上で卒業が見込まれ、本人・保護者と合意形成の可能な生徒としている。1年次は、その生徒の課題が経験不足によるものか能力によるものかを見立て、経験不足によるものであれば全教員で支援しながら経験させることで課題の克服を図ることとした。卒業が見込まれ本人・保護者との合意形成が可能な生徒を対象としたことで、生徒自身が卒業後の自立と社会参加をスムーズかつ意欲的に行い、「通級による指導」が、障害による学習上又は生活上の困難を改善し、又は克服することを目的とする指導の必要性を理解し、自分の困難を改善・克服しようという意思をもって授業を受けることで、学習効果を一層高められるように考えた。

また、高等学校における「通級による指導」は、単位認定をし、指導要録や調査書に自立活動を修得していることが明記される。自立活動が特別支援学校学習指導要領に示されている指導領域で領域別の指導あることを本人・保護者ともに理解した上で授業を開始することとなった。

(ウ) 指導内容

「通級による指導」の指導内容については、対象生徒に対して作成した個別の教育支援計画及び個別の指導計画の目標に基づき指導内容を検討することとした。検討した指導内容をもとに通級担当者で授業の原案を作成し、授業担当者3名で毎週1回相談して授業の内容を決定する。授業の内容が決定すれば、特別支援学校の特別な指導領域である自立活動と照らし合わせながら指導略案を作成することとした。加えて、授業終了後は指導案とともに授業内容や授業時の生徒の様子の記録を通級担当者3名と担任、部主任、スクールカウンセラーで回覧し、授業改善と学習により得た力を学校生活や日常生活に生かすことができるよう、また、共有できるようにした。



4 先行実施（令和元年度の取組）

令和元年度においては、「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」の調査研究として、校内体制の整備、「ICT機器を使用した学習支援の試行」及び6名の生徒による「通級による指導」に取り組んだ。

（1）校内体制の整備

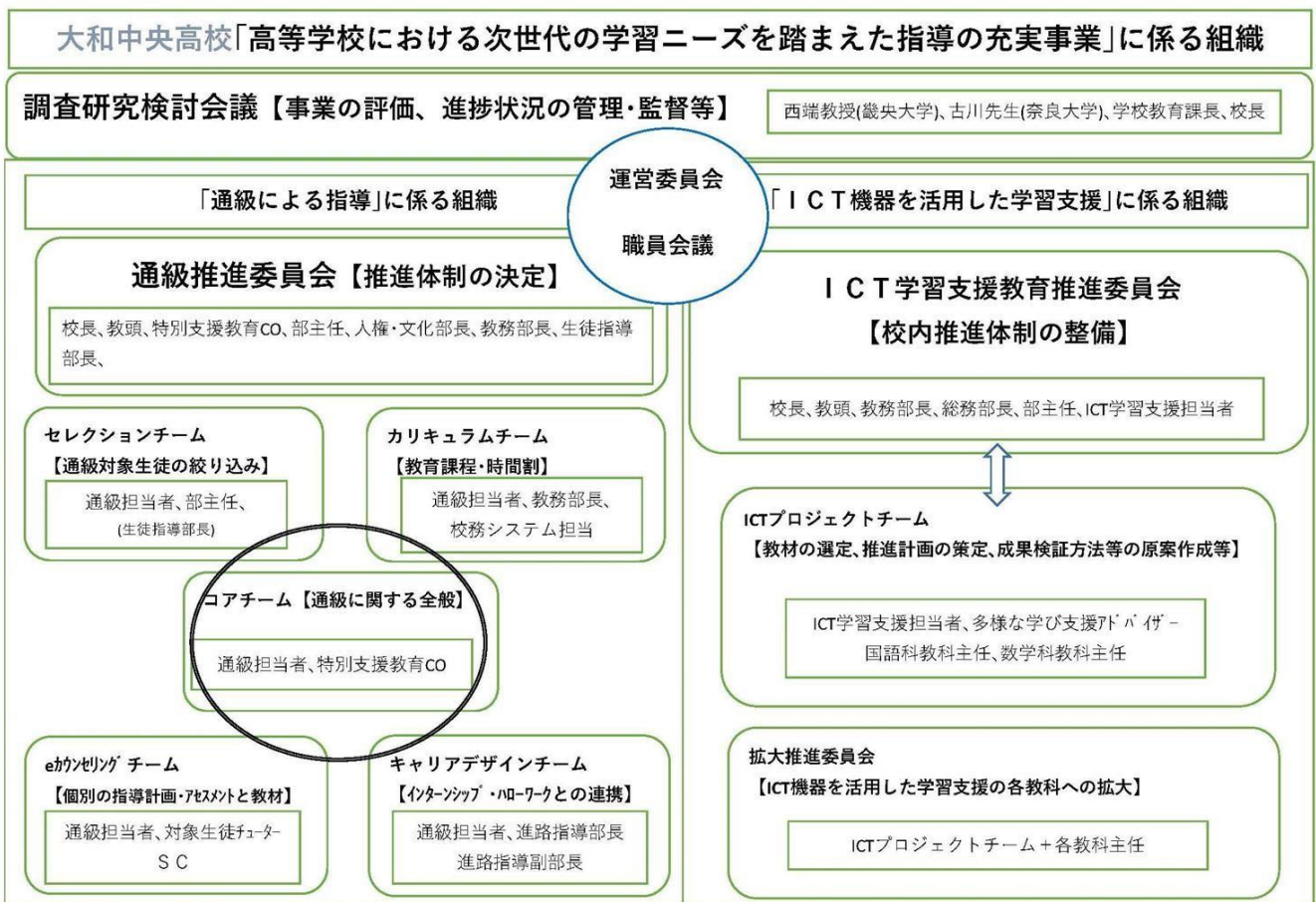
ア ICT学習支援教育推進委員会

研究を開始するにあたり、校内において、ICT機器を活用した学習支援体制を整備した。まず、教材の選定・実践など、本研究を中心となって推進する「ICTプロジェクトチーム」を組織し、次に、すべての教科においてICT機器の活用を促すために「拡大推進委員会」を設置した。さらに、上位組織として、「ICT学習支援教育推進委員会」を設置し、情報担当者主任が本組織に加わった。また、ICT機器の効果的な活用を推進するために、多様な学び支援アドバイザー(以下アドバイザーとする)を配置した。アドバイザーは、ICT機器の管理、指導及びモバイル学習教材の成績処理の補助等、本研究を推進するための包括的な助言を行った。

イ 通級推進委員会

通級推進委員会は、校内の中心的な機関である本校の特別支援教育を推進する特別支援委員会と兼ねている。通級推進委員会で「通級による指導」に関する検討を行うには、委員会は約20名で構成されており、会議の日程調整でうまくいかず必要ときに必要な会議を臨機応変に行いにくいと考えた。そこで、主な議題ごとに職員室の片隅でできる小規模チームを5つ編成することにした。その中でも、コアチームの会議は、「通級による指導」の充実のため、通級に関わる全般的な内容の検討を行うなど中核を担うこととした。

図3 本研究に関する組織図



(2) 「ICT機器を活用した学習支援」

令和元年11月から令和2年1月までの3ヶ月間、基礎学力の向上を目指し、生徒1人1台のタブレット端末によるモバイル学習教材を活用した授業実践に取り組み、成果と課題の検証を行った。

ア 対象生徒

1年次9学級の内1学級に在籍する18名を対象に研究を行った。この学級の生徒も18名中16名が不登校の経験を有し、他校から再入学してきた過年度生徒1名を含んでいる。

イ 使用するソフト

モバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ（株式会社ティエラコム）」を使用した。なお、本研究においては、モバイル学習教材内の小学校4年生から中学校3年生までの「数学(算数)」と「国語(漢字)」分野の問題を反復して活用し、基礎学力の定着を図った。

ウ 「学力到達度テスト」及び「意識調査(学習意欲に関する調査)」の実施

研究試行として、学力到達度の変化を検証することを目的とし、数学(算数)及び国語(漢字)の「学力到達度テスト」、また、学習意欲の変化を検証することを目的とした「意識調査(学習意欲に関する調査)」をそれぞれ研究の事前(10月実施)及び事後(1月実施)に実施した。

数学(算数)の学力到達度テストは、授業で使用している問題集(東京書籍「ラレボ」)を活用し、小学校4年生以下の問題12問、小学校4年生以上の問題12問を抽出し出題した。国語の「学力到達度テスト」では、同じく授業で使用している問題集(尚文出版「常用漢字オールクリア」)を活用した。問題は、漢字検定7級から漢字検定4級に相当する範囲から書き取り問題として各5問、漢字4級に相当する問題から書き取り問題を1問、読み問題を4問の合計20問を作成、出題した。この出題方法は、問題集に付属していた小テストを参考に作成した。意識調査(学習意欲に関する調査)では、学習意欲に関して、以下の6つの項目で5段階評価アンケートを行った。

- ① 勉強が好きであるか(好きになったか)。
- ② 得意であるか(得意になったか)。
- ③ 高校に入学して、勉強が好きになった。
- ④ 高校に入ってからテストを受けるのが好き(得意)になった。
- ⑤ 卒業するまでに高校の勉強は身に付けたい。
- ⑥ 勉強すれば、将来、何かの役に立つと思う。

エ 「事前テスト」の結果

(ア) 学力到達度テスト(10月実施)

数学(算数)においては、小学校4年以下の問題では、12問中8問以上を正答した生徒は、14名(当日欠席した生徒がいるため)中10名であった。12問満点の生徒も3名いたが、小学校4年生以上となると、12問中8問以上を正答した生徒は、1名であった。中には0点の生徒もあり、つまずきの境界は、小学校4年生段階であると推察できた。

国語(漢字)においては、漢字検定7、6級相当の書き取りで、10問中5問以上正答した生徒は、15名中3名であった。同じく、5級、4級相当の書き取り及び読みでは、10問中5問以上正答した生徒は、15名中4名であった。また、1名の生徒は、15問中1問も正解することができなかった。この結果から、つまずきの境界がどの時点であるか推察することはできなかったが、漢字については、読み・書きにおいて、総じて学力が低く、苦手意識も非常に強いことが判明した。

(イ) 意識調査（学習意欲に関する調査）（10月実施）

意識調査においては、項目①、②について、15名中13名が否定的な回答をし、残る2名は「どちらとも言えない」と回答した。また、項目③、④では、肯定的な回答が見られなかったが、項目⑥では、肯定的な回答した生徒が、15名中7名いた。これらのことから、対象生徒は、学習に対して、積極的なモチベーションは持っていないが、興味や関心を全くもっていないわけではないことが推察された。また、自由記述欄からは、「将来何になりたいか分からない。」や「とりあえず仕事(に就かないといけない。）」との記述が見られ、卒業後の不安をもち、悩みながら学習を続けている生徒が複数名存在することも分かった。

(ウ) 学習の様子

初回の学習は、端末操作に慣れることやモバイル学習教材に親しむこと等を目的として、教科やレベルを生徒が任意に設定して学習し、2回目以降の学習は、10月に実施した事前テスト及び学習意識調査等の結果を参考に、プロジェクトチームのメンバーが各生徒の学習到達度の目標設定を行い、生徒は、この目標に応じた課題に取り組んだ。また、目標設定は生徒によって異なるため、前回の学習の記録を記入した学習記録用紙を各生徒に配布し、生徒が自分自身で学習到達度を確認できるよう工夫した。

学習中、教員はチームティーチング体制で、質問への対応や、気になる生徒へのサポートなどを行った。解答を間違った生徒には、「心配しなく良いよ、次にも同じ問題がでてくるから。」、「次は2択になるよ。」と前向きな学習が可能となるよう言葉かけをしたり、「解説を読んで、解いてみてごらん。」と解説を見せながら学習のサポートをしたりするなど、学習への意欲や学習を続ける姿勢の持続を目的とした支援を行うよう留意した。

モバイル学習教材に対する生徒の学習意欲や集中力は、当初想定していたより高いと感じた。当日分の課題が終了した生徒は、前回の続きをしたり、さらにグレードをアップした学習したりする生徒の姿も見られた。また、学習後には、学習記録用紙に、タブレット端末の学習に関する感想を記述させ、その内容をプロジェクトチーム内において分析し、生徒の学習状況の変化を把握するための資料として活用した。1週間に1回は、モバイル学習教材に取り組む機会を持つようにした。

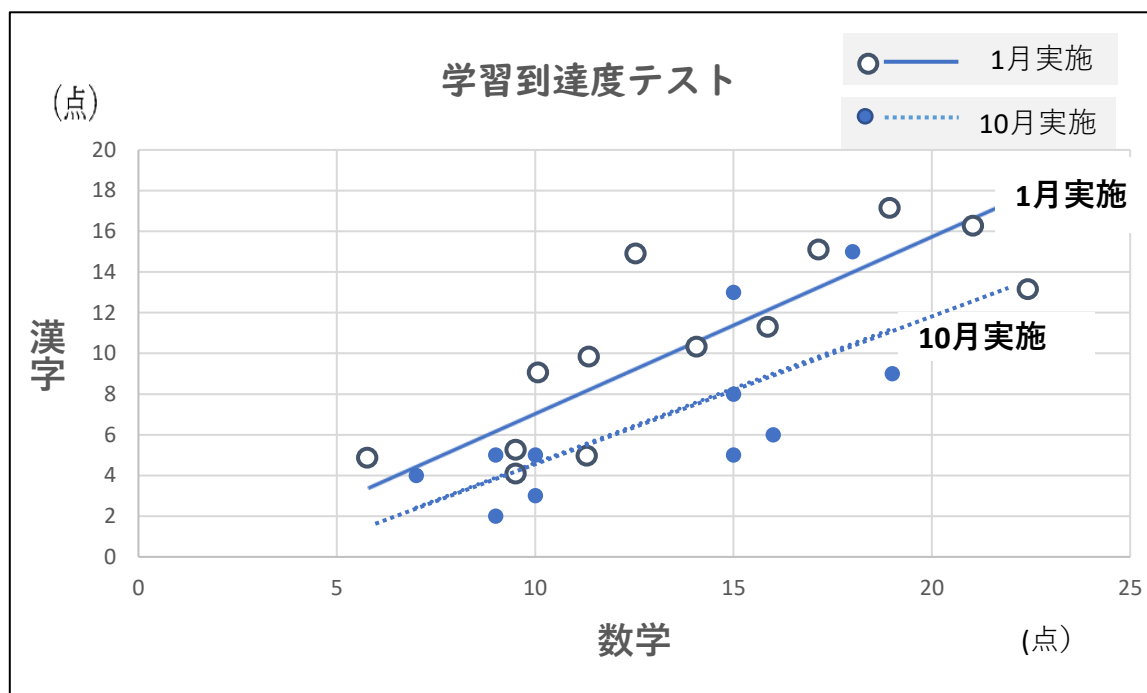
オ 「事後テスト」の結果

(ア) 学力到達度テスト（1月実施）

数学（算数）においては、正答者数は、小学校4年生以下の問題では、12問中8問以上正答した生徒が、13名中12名と大幅に増加した。小学校4年生以上の問題では、12問中8問以上を正答した生徒が、13名中3名となり、1名増加した。正答数における伸び率は小さいが、全問正解した生徒がでてきたことやケアレスミスによる誤答をする生徒が減少したことなど、基礎学力に一定の向上傾向が見られた。

漢字においては、正答者数は、漢字検定7、6級相当の書き取りでは、10問中5問以上正答した生徒が、13名9名と事前テストから倍増した。5、4級相当の問題でも約半数の生徒が10問中5点以上正答した。また、生徒の個別の成績結果においても、事前テストから大幅に正答数が増加した生徒が複数名見られたり、書き取りで1問も正解することができない生徒がいなくなったりするなど、基礎学力の向上が見られた。

図4 学習到達度テスト（10月実施、1月実施）結果



(イ) 意識調査（学習意欲に関する調査）（1月実施）

調査の回答から、項目①、②について、13名中11名が否定的な回答をし、1名は事前調査と変わらず「どちらとも言えない」、1名は肯定的な回答した。また、項目⑤、⑥では、事前テストの結果との変化は見られなかった。自由記述欄に書かれたモバイル学習教材を使用した学習の感想では、「勉強ができてよかった。」、「サクサクできて楽しかった。」などの前向きな感想が一部に見られた。なお、「勉強が好きになり、得意になった。」と回答した生徒の中には、高校に入学後、欠席がなくなり、大学進学を目指すようになった者がいた。校内においても上位の成績を維持し、勉強が好きだと感じるようになったことをきっかけにいろんなことに自信がもてるようになっている。

(ウ) 成果と課題

学習面において、漢字の学習については、学力の向上とともに、学習意欲の高まりが見られたが、数学（算数）については、依然として苦手意識が強く、「数学(算数)は難しい。」、「解くのに時間がかかる。」などの理由が生徒から聞かれた。また、意識調査においては、取組前後で大きな変化は見られなかった。授業内におけるICT機器の活用については、生徒は、集中して取り組んでいる様子が見られるが、ほとんどの生徒は自宅で活用するまでには至っていないことから、今後、生徒の興味・関心をより高める「仕掛け」を作ることで、生徒のモチベーションを高め、学習時間の増加につなげる必要がある。

(3) 「通級による指導」

平成30年10月からの試行を経て、令和元年4月から生徒6名を対象に始めた。

ア 対象生徒

2年次1名、3年次4名、I部4年次1名(ASD傾向5名、ADHDの診断あり1名)の計6名である。どの生徒にも共通しているのは、これまでの失敗経験から自己肯定感が低く、自尊感情も低い。また、ASD傾向5名の主たる課題はコミュニケーションであり、特に同世代とのコミュニケーション

ンがスムーズにいかないことが多い。ADHDの診断のある生徒は、過度な緊張状態や注意欠如があり、不安な気持ちから過度に確認作業をしてしまうという課題がある。

イ 学習内容

個別の指導計画を基に個々の教育的ニーズに合わせた内容を取り入れている。指導においては、どのような活動や場面であっても、自己肯定感や自尊感情を高めていけるよう常に生徒を肯定するように心掛けている。本校を卒業するときには、自分に自信をもち、社会の一員として主体的に自立と社会参加できることを目指したいと考えている。

したがって、「通級による指導」では、気持ちの変化に自ら気づき、自分の気持ちを整理できるようになるために、授業の開始時と終了時に生徒自身が「今のこころの状況」を1～5段階で評価するとともに「今日の授業の感想」を書くように指導した。

ウ 事例

(ア) 4年次 生徒A (ASD傾向)

生徒Aは、昨年度から「通級による指導」を受けている。指導開始前の本人に対する聞き取りでは、「ただただと話してしまい、まとまりがなくなってしまう。また、無理に難しい言葉を使おうとしてしまうので、相手に意図が伝わりにくくなってしまう」や「自分に自信がないので、今まで授業で発言したことはない」など自分の課題を明確に把握していた。また、WAIS-IV知能検査を行った。言葉の意味を理解する力は高いものの、言葉を整理できずに回答する様子がよく見られ、また、決められた時間で作業を行うのは苦手で、自信のない姿を見せ、とてもゆっくりと丁寧に仕上げようとする様子が見られた。検査場面からも、自己肯定感を高め、自分の考えを整理したうえで発言するような習慣付けが必要と感じられた。したがって、個別の指導計画の目標には「自分の行動に自信をもち、自分の思いなどを的確に伝えられるようになる」とした。

図5 生徒Aによる自己評価

○自己評価○

	1	2	③	4	5
理由	⇒ 先生の方がりやすい説明のおかげで、				
	変えないといけない点に気付くことができたからです。				
今日の感想	自身の重カ画を見るのがはずかしかったです。				

学習内容「自分の意見をまとめてみよう」では、将来の就職活動で必ず必要になる自己PRを題材にした。生徒Aの強みは言語理解力が高く難しい言葉もよく知っていることだが、障害による特性から、重要な事の整理や順序立てた説明が不得手であると考えられた。そこで、まずは自分のいいところをできるだけ多く言語化し、それをグループ化してPRする内容を2つ選び出すことにした。そして、それぞれについてのエピソードを考え、エピソードの中のキーワードを3つだけメモすることにした。自己PRを話すにあたり、PR内容2つとそれぞれのキーワード3つずつの計8つの単語を覚えるようにした。言語理解力の高い生徒Aにとって単語を覚えることは比較的容易で、その順序を紙に書いて

記憶することによって、スムーズに話すことができた。そして、実際に自己PRの様子を動画で撮影し、自分で改善点はどこかを確認しながら練習した。その結果、授業の最後にはとてもまとまりがよく、的確に話すことができた。この授業の終わりの感想には、「先生の分かりやすい説明のおかげで変えないといけない点に気付くことができた。」と書いていた。

この生徒は、初めて「通級による指導」を受けた日の感想に「自分のようにコミュニケーションに課題がある人にとって、この授業が、奈良県中の学校、日本中、世界中に広がると、ハッピーになる人が増えると思います。」と書いていた。そして、最後の授業では「1年半、この授業を受けて人が変わったように成長したと実感しています。僕はこの授業が大好きでした。今後もこの授業を続け、たくさんの方が僕のように自信を付けてほしいと思います。」と書いていた。この生徒は、「通級による指導」を受けてからかなり自信をもったようで、授業では積極的に挙手するようになり、就職試験も一社目で内定を得ることができた。更に、卒業式では卒業生代表として答辞を読むことになった。この生徒は、この「通級による指導」によって大きく成長した1人である。

(イ) 3年次 生徒B (ASD傾向)

生徒Bは、今年度4月から「通級による指導」を受けている。「通級による指導」を始める前の聞き取りでは困っていることとして「物の管理ができない」と言っていた。また、担任からは「コミュニケーションに課題があり、同世代とスムーズなコミュニケーションがとれない。本人はそれに気付いていない。」と課題を挙げた。したがって、個別の指導計画では「自己の理解を高め、自己管理ができるようになる」「適切な人間関係を築けるように、適切なやりとりを身に付ける」とした。

学習内容「自己管理」では、サイズ、月表示か週表示か、日曜始まりか月曜始まりか、時間ごとに記載できるものか、日ごとに記載するものかなどを自分で選び、オリジナル手帳を作成した。手帳には、今後の予定やメモを書くことにし、常にカバンに入れておくことを約束した。その後も今後の予定やメモを書いており、継続して活用してくれている。

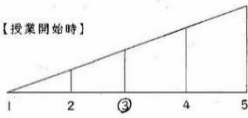
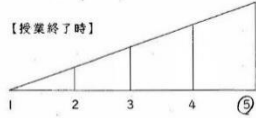
学習内容「状況に応じた対応」では、通級担当者によるロールプレイで、C、Dの2人が話をしている横をEが通りがかったとき、CはDと話の途中にも関わらず、Eに話しかけるという状況を見せた。これは生徒Bが普段してしまう行動である。ロールプレイを見た生徒BはCが『「状況に応じた対応」をできていない。』『「Dがかわいそう。」』と言った。その後、Cが自分と似ていることに気付いた。他にも「状況に応じた対応」を想定した学習に取り組んだ。また、毎週の「通級による指導」で認知機能を高めるプリントを繰り返してきたため、少しずつ自分を客観視できるようになったり、自分の言動にブレーキをかけることができるようになったりし、「状況に合わせた対応」ができるようになったと考えられる。

図6 「通級による指導」
の生徒による活動記録

「社会生活」 活動記録

12月17日 火曜日 名前 _____

○今のこころの状況○ ※数字に○をつけよう

【授業開始時】  【授業終了時】 

○授業の感想○

今の行動をいっしょに、社会に出た時に、自分も行動がわかる、夫から褒められる
行動していると思えた。

自分の得意を見つけよう

7月2日 クラス 11F 名前 _____

◎プリントに取り組んだ後、あてはまるところに○をつけよう。
※見本「得意」と感じた場合

①覚える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
②数える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
③写す	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
④見つける	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
⑤想像する	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意

◎一番得意なものは①～⑤のうちどれですか？

④

自分の得意を見つけよう

11月19日 クラス 11F 名前 _____

◎プリントに取り組んだ後、あてはまるところに○をつけよう。
※見本「得意」と感じた場合

①覚える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
②数える	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
③写す	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
④見つける	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意
⑤想像する	得意ではない	あまり得意ではない	少し得意である	得意

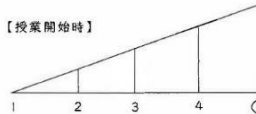
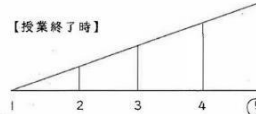
◎一番得意なものは①～⑤のうちどれですか？

①

「社会生活」 活動記録

11月19日 火曜日 名前 _____

○今のこころの状況○ ※数字に○をつけよう

【授業開始時】  【授業終了時】 

会社見学がよかった

○授業の感想○

全部、得意になれたからうれしい。想像力ができてよかった。
また、次も全部得意になるようにがんばる

令和元年	6月3日	月	文部科学省「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」(以下「事業」とする。)の公募	
	6月7日	金	教育セミナー2019(教育研究所)にて「本校の通級について」の講演	
	6月17日	月	校内研修会の実施「通級指導について」	
	6月21日	金	県教委(担当:学校教育課)から文部科学省へ「事業」の企画提案書を提出	
	7月17日	水	文部科学省から「事業」委託の内定	
	7月29日	月	通級連絡会を開催(学校教育課4名、教育研究所1名、本校職員6名)	
	7月31日	水	県教委(担当:学校教育課)から文部科学省へ事業計画書を提出	
	8月29日	木	教育研究所「高等学校における通教による指導研修講座」で「通級について」の講演	
	9月19日	木	本事業担当者打ち合わせ(学校教育課2名、本校職員6名)	
	9月20日	金	文部科学省と「事業」の委託契約	
	9月25日	水	検討会議に係る委員就任依頼の発出	
	10月30日	水	「事業」用タブレット購入(25台)、動作確認	
	11月1日	金	「事業」アドバイザー内定	
	11月18日	月	「事業」第1回検討会議	
	11月25日	月	兵庫県高等学校における通級による指導実践研究協議会に参加	
	11月27日	水	鳥取県立邇摩高等学校へ訪問	
	11月28日	木	鳥取県立米子白鳳高等学校へ訪問	
	令和2年	1月17日	金	奈良大学 古川先生による「社会生活」の授業視察と指導助言
		1月22日	水	タブレットとアプリの活用に係る職員研修
		1月31日	金	畿央大学 西端教授によるモバイル学習教材の授業ビデオ視聴と指導助言
	2月3日	月	長崎県立佐世保中央高等学校へ訪問	
	2月4日	火	佐賀県立厳木高等学校、佐賀県立太良高等学校へ訪問	
	2月12日	水	ICT学習支援プロジェクト会議	
	2月14日	金	「事業」第2回検討会議	

表8 本研究における研究計画(令和元年度)

5 研究実践（令和2年度の取組）

令和元年度の研究を踏まえ、対象生徒及び実施時期を拡大して「ICT機器を活用した学習支援」及び「通級による指導」により、生徒の社会自立や生きる力の確立を目標とした実践研究を行った。

（1） 「ICT機器を活用した学習支援」

ア 学習支援

1年次(令和2年4月入学生)の全生徒140名を対象に研究を行った。それぞれのクラスに在籍する生徒の大半は不登校を経験していた。また、学習的配慮を含め、教育的ニーズを抱えた生徒が多く、多様性に富んでいる。

イ 使用するソフト

モバイル学習教材「ビットキャンパスタッチ（株式会社ティエラコム）」を使用した。

ウ 「学力到達度テスト」及び「意識調査（学習意欲に関する調査）」の実施

令和元年度の先行研究を引き継ぎながら、学力到達度の変化や比較を検証することを目的とした数学(算数)及び国語(漢字)の「学力到達度テスト」を、研究の事前(6月)及び、事後(11月)に実施した。また、学習意欲の変化を検証することを目的とした「意識調査(学習意欲に関する調査)」を、本研究の事前(6月)、中間(9月)、及び事後(11月)に実施した。テスト及び調査は、令和元年度で実施したものと同様とし、形式も継承実施した。数学(算数)は、授業で使用している問題集(東京書籍「ラレボ」)を活用し、国語(漢字)は、授業で使用している問題集(尚文出版「常用漢字オールクリア」)を活用し、作成・出題した。意識調査(学習意欲に関する調査)では、学習意欲に関して、以下の6つの項目で5段階評価アンケートを行った。

- ① 勉強が好きであるか(好きになったか)。
- ② 得意であるか(得意であったか)。
- ③ 高校に入学して、勉強が好きになった。
- ④ 高校に入ってからテストを受けるのが好き(得意)になった。
- ⑤ 卒業するまでに高校の勉強は身に付けたい。
- ⑥ 勉強すれば、将来、何かの役に立つと思う。

エ 「事前テスト(6月実施)」の結果

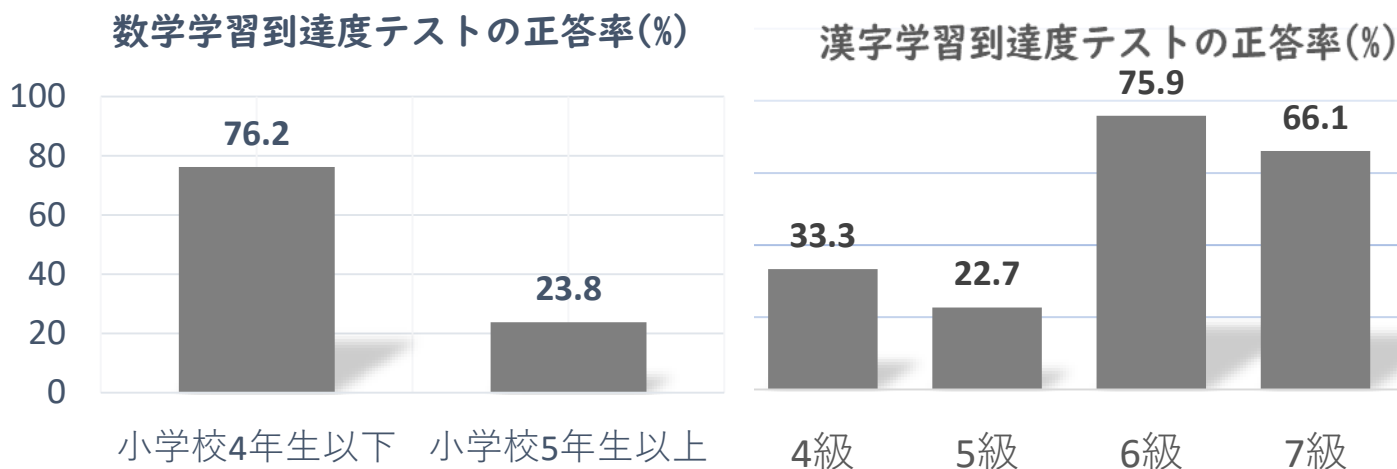
(ア) 学習到達度テスト(1回目:6月実施)

数学(算数)においては、小学校4年生以下の問題から14問、小学校5年生以上の問題から8問を抽出して出題した。その結果として、4年生以下の問題については、正答率が76.2%であったが、5年生以上の正答率は23.8%となっており、4年生以下の正答率と5年生以上の正答率に大きな差が見られた。この傾向は、前年度の調査結果と同様であり、対象生徒の数学(算数)におけるつまづきは、小学校5年生を境に見られることが推察できた。

漢字においては、日本漢字能力検定問題集の7級から4級の問題(5級が小学校6年生程度に該当する問題)より各級より5問ずつを抽出して出題した。その結果として、7・6級では、正答率が約7割と比較的高い水準であったが、5級になると正答率は一気に下がり2割程度、4級においても3割程度と低い水準であった。このことから、対象生徒の漢字におけるつまづきは、5級(小学校6年生程度)であることが推察できた。なお、前年度の調査との比較において、令和2年の対象生徒は、全

一般的に文字に対しての抵抗感や苦手意識をもっているが、学習に対する能力が備わった生徒が複数存在することも同調査から推察できる。

図7 数学・漢字学習到達度テストの正答率



(イ) 意識調査 (学習意欲に関する調査) (1回目: 6月実施)

意識調査においては、項目②「勉強は得意であるか」について、8割程度の生徒が否定的な回答をしているのに対し、項目①「勉強は好きであるか」については、否定的な回答をした生徒は、6割に止まった。このことから、対象生徒の中に、「勉強は得意ではないが、嫌いでもない」と考えている者も存在することが判明した。また、質問項目⑤「勉強は身に付けたいと思っている」、及び⑥「勉強は役に立つと思っている。」に対しては、前年度と同様、両項目ともに肯定的な回答をした生徒が多かった。中でも、項目⑤については、令和2年度の対象生徒は、令和元年度の生徒と比較し、肯定的な回答をした生徒の割合が高い傾向が見られた。これらの結果から、多くの生徒が、学習することに対して、苦手意識はもちながらも、自分の将来ためには学習は有意義であると考えていることが推察され、今後、このような生徒の学習のつまづきを解消していくことで、生徒の学習への意識が変化し、自信につながるのではないかと考えた。

オ 調査研究 1

(ア) 学習の様子(4月～7月)

当初の計画においては、5月の研究開始時からタブレット端末・モバイル学習教材を活用した取組を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症防止による休業措置(在宅学習)が実施されたため、計画の見直しを行った。休業期間中は、自宅においてモバイル学習教材を活用した学習が可能となるよう案内プリントを作成し、休業前の面談時に配付・説明した。しかし、後にデータを検証した結果、実際にログインをした生徒は少なかった。その要因として、入学後、学校の授業が行われないうちに休業期間に入ってしまったために、各生徒に対して学習への動機付けが十分できていなかった点が考えられるが、ICT機器の特長である遠隔における活用ができなかった点は、今後の課題として残された。

6月から授業が開始され、数学、国語を中心に各授業で、週1回程度、約10分間モバイル学習教材を継続して活用し、どのような学習効果が見られるか調査研究を開始した。生徒が取り組む課題は、各生徒の学習到達度テストやアンケートの結果に加え、モバイル学習教材に記録された学習結果のデ

ータを分析し、十分に吟味の上学力に応じたものを選定し、見やすいプリント（「個票」）を作成して、生徒に提示した。

モバイル学習教材を活用した学習を進める中で、正答数や正答率に応じて得られるポイント機能が生徒のモチベーションに影響していることが分かり、「個票」に得られるポイントを目標値として生徒に提示するようにした。生徒には、学習後に得たポイントをモバイル学習教材のトップ画面で確認させ、個票に記録させた。その結果、目標値に到達することを目指して学習を進める生徒が多く出てきた。目標ポイントを明確に提示することで、生徒の取組の基準ができ、それが学習への動機付けとなり、集中力の高まりも見られた。「個票」は、数回の改訂を経て、以下のものとなった。

また、授業以外での使用時間を増やすことをねらいに、7月27日～31日の昼休みに取組推進週間を設定した。担当教員など数名が教室で待機し、簡単な質問に応じるなどの学習支援を行った。毎日4～7名の生徒が任意参加してきた。家庭学習の習慣を持たない生徒が多い中、このように積極的に学習に参加する姿が見られたのは大きな進展であった。

図8 学習している生徒(写真)と配布している改訂前後の「個票」



(改訂前)



(改定後)



(イ) 意識調査(学習意欲に関する調査)について(2回目:9月実施)

夏期休業後の学習意欲の変化を調べるために意識調査を行った。

質問項目①、②において肯定的な回答の割合が減少した一方で、項目③、④において肯定的な回答が増加した。①、②の変化については、学習習慣や勉強に対するモチベーションが低い生徒にとって、学校が再開したことによって、学校に対する抵抗感や不安感が増したものと考えられる。その反面、③、④については、本校に入学するまで、勉強やテストに強い抵抗感をもっていた生徒が、個人の学習到達度にあう課題に取り組み、正解するという成功体験を積んだことで、学習への肯定的な意識の変化が表れ、このような学習への前向きな気持ちが、学習に対する自信につながっているものと考えられる。また、このことが項目⑤、⑥においても、肯定的な回答の割合が増加している要因の一つと考えられる。

カ 調査研究 2

(ア) 学習状況(9月~12月)

入学から約半年が経過し、学習内容が難しくなったことや学校生活への緊張感が緩んだこと等の理由により、新入生全体が授業に対して学習意欲が低下し、集中力が持続しない傾向が見られるようになった。しかし、そのような状況の中でも、約10分間の短時間の学習時間において、モバイル学習教材に集中して学習に取り組む生徒の姿が見られた。

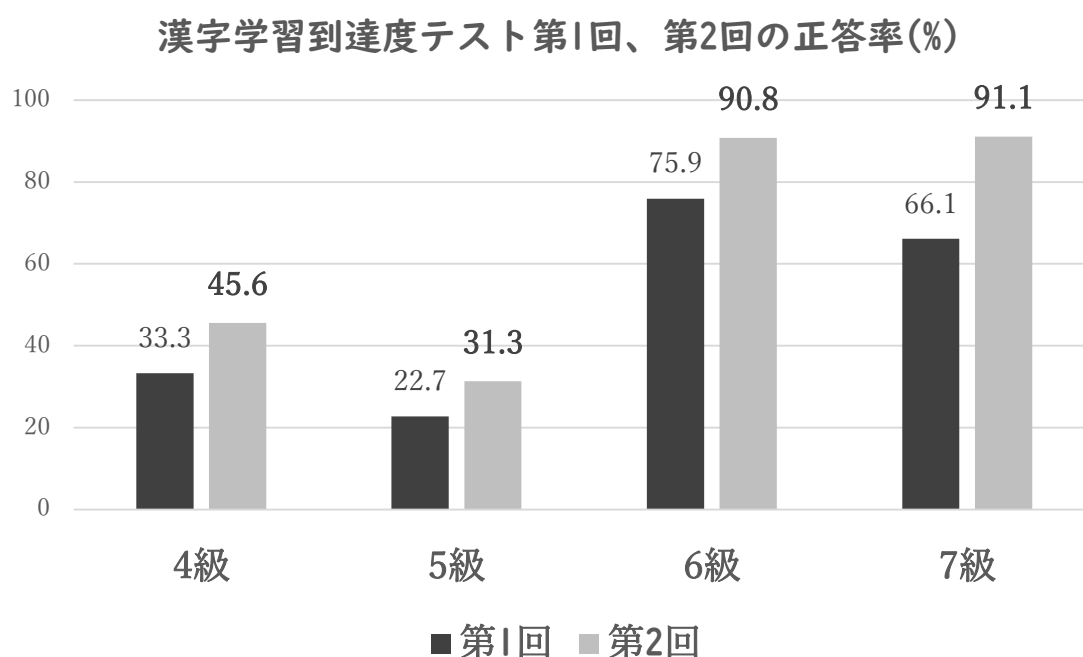
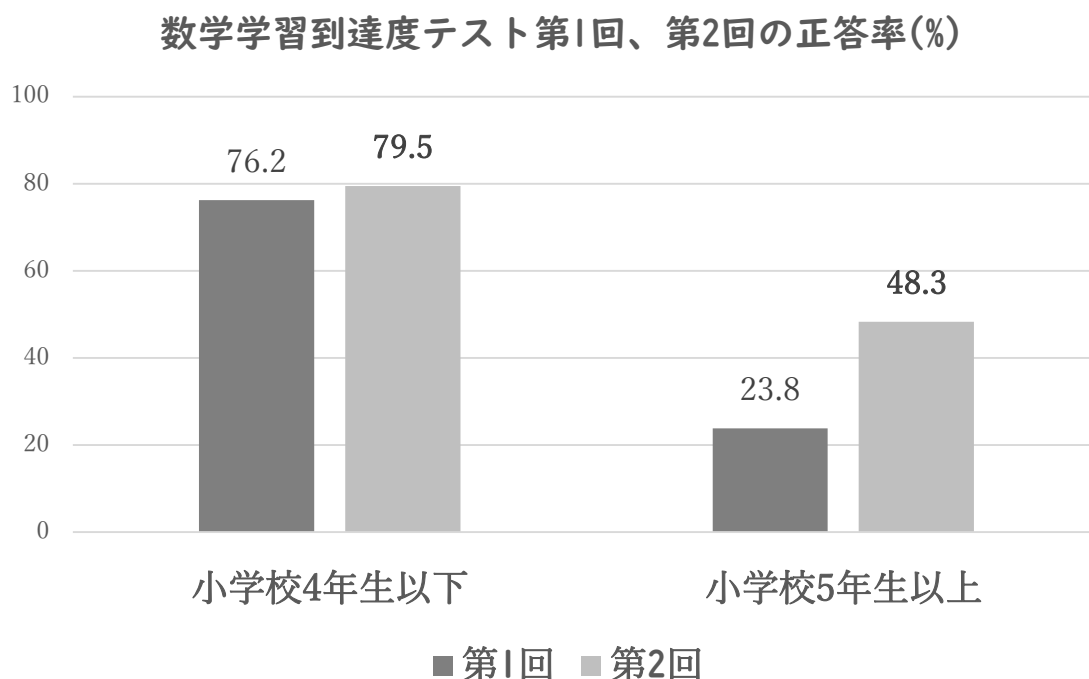
本研究においては、基礎学力の向上に努めるために、生徒がどの段階でつまづいているのかを知り、継続的にモバイル学習教材を活用することで克服できると仮定した。その克服には、一斉授業ではなく、個別に課題に向かうことができるよう、明確に提示する必要があった。タブレット端末・モバイル学習教材の学習は、各生徒のつまづきに応じて学習内容や到達目標をその都度容易に設定でき、また、生徒は他者の目を気にすることなく自分のペースで学習ができるため、モチベーションを維持したまま学習に取り組むことができたのではないかと考える。実際、生徒の中でも「これならできる。」という声が多く聞くことができた。

(イ) 学力到達度テストについて(2回目:11月実施)

数学や英語といった科目に苦手意識を持っている生徒が多い。数学は、小学校高学年の算数内容の分数や割合、面積などでつまづき、そこから分からなかったのが原因で、嫌いな教科となる生徒が多い。短い期間ではあったものの、モバイル学習教材で苦手な範囲を繰り返したことで、「なんとなく分かってきた。」と感想を話す生徒もいた。取り組みも教科の指定がないと、数学を避ける傾向にあったが、学力到達度テスト第2回目の結果、小学4年生以下で満点を取るなど正答率で3.3%の伸びがさらにあり、小学5年生以上になると、正答率が約25%の伸びとなった。

国語においても同様の伸びが見られた。生徒の中には、「モバイル学習教材では書き取りができないので、不満である。」との意見も出されていた。漢字の読みだけでは、本当に実力がついたのか実感が分からないらしい。しかし、学力到達度テストの結果をみても、漢字の読み問題を繰り返し反復で行うことで、確実にそれぞれの級で正答率は上がっている。6級や7級など小学校高学年の学習漢字においては、9割を超える正答率であり、学習到達度テストの漢字の書き取りにも、字を丁寧に書いている様が見られた。第1回目では、4級や5級に未回答も目立ったが、第2回目には間違っているが、回答欄への記入や消しゴムで何度も消した痕跡が見られ、答えようとする生徒が増えていた。これらは、モバイル学習教材で取り組んだ成果や学習姿勢の向上であると考えられる。

図9 数学・漢字学習到達度テストの正答率



(ウ) 意識調査(学習意欲に関する調査)について(3回目:11月実施)

過去に行った3回の学習意識調査の比較は以下である。

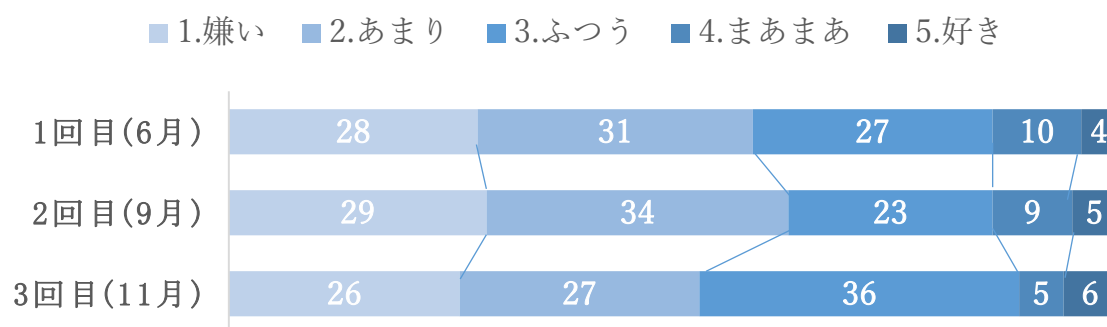
学習意識調査では、第1回目や夏季休業明けに行った調査より第3回目では、①についての「勉強は好き」と答える生徒は減ったものの、「勉強は嫌い」と答える生徒が減った。同様に、②についての「勉強を不得意」と答える生徒が減っている。夏期休業直後の調査では、長期休みの慣れから、勉強や学習を行うことに対する抵抗が出てきていたのかも知れないが、学校生活や学習が軌道にのり、学

習課題をモバイル学習教材で短時間行うことを繰り返すことにより、学習や勉強への抵抗感は薄れていくものと考えられる。タブレット端末での個別課題にあった学習を繰り返すことにより、短時間で正解となることで、嫌いな感情や苦手意識が薄れているのではないかと考察できる。③、④についての「入学後勉強が好きになった」・「テストが好きになった」では、3回目の調査結果でも、「好きになった」と答えた生徒が多くなっている。これらは、タブレット端末での学習効果に加え、学校生活や教科学習での効果も大きく加味されていると考える。

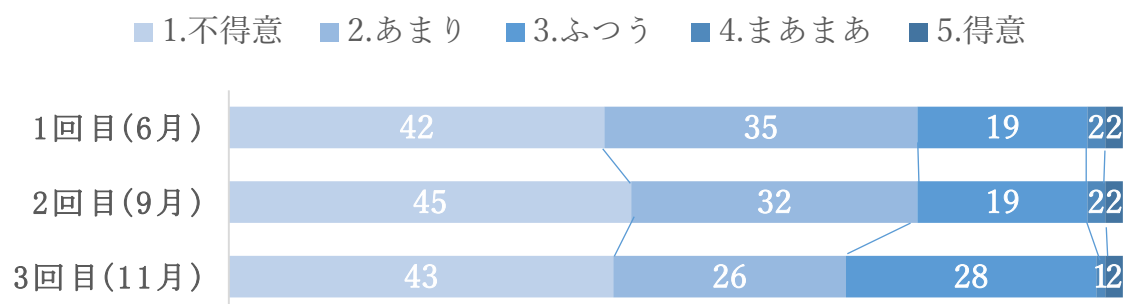
ただ、⑤「勉強を身に付けたい」・⑥「役に立つと思う」では、予想をしていたポイントの向上は見られなかった。長期間学習をすることにより、モバイル学習教材の学習内容が高度になり難易度が上がっているが、生徒個人の意識の中で達成感や満足度は上がっているとは言えず、体得感が得られていないのかも知れない。1年間学習を続け、各教科の成績を受け取る時には、またこれらのアンケートに変化が出てくるのではないかと考える。

図 10 意識調査の結果

①勉強は好きである

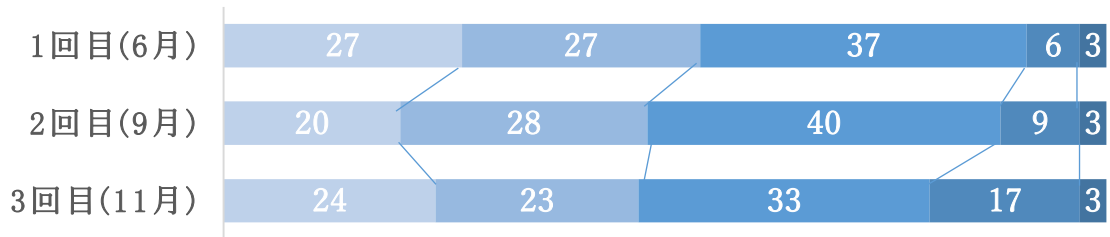


②勉強は得意である



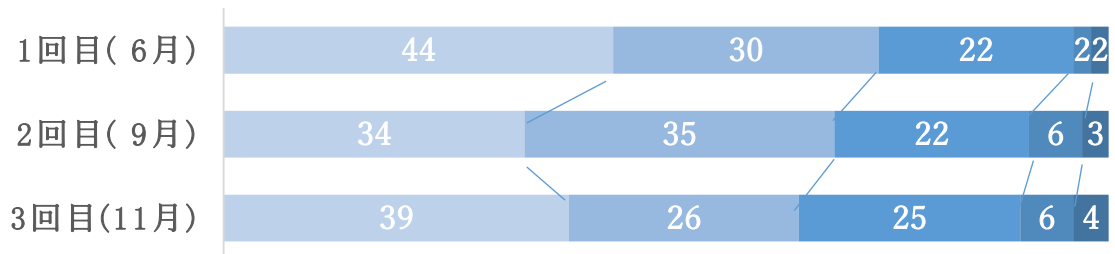
③ 入学後勉強が好きになった

■ 1.なっていない ■ 2.あまり ■ 3.ふつう ■ 4.まあまあ ■ 5.なった



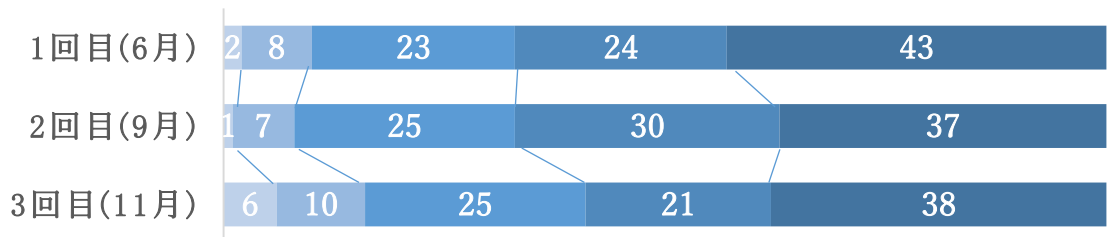
④ テストが好きになった

■ 1.なっていない ■ 2.あまり ■ 3.ふつう ■ 4.まあまあ ■ 5.なった



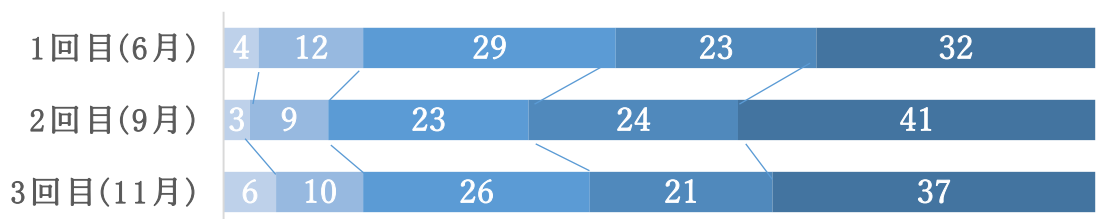
⑤ 勉強を身に付けたい

■ 1.つけない ■ 2.あまり ■ 3.ふつう ■ 4.まあまあ ■ 5.つけたい



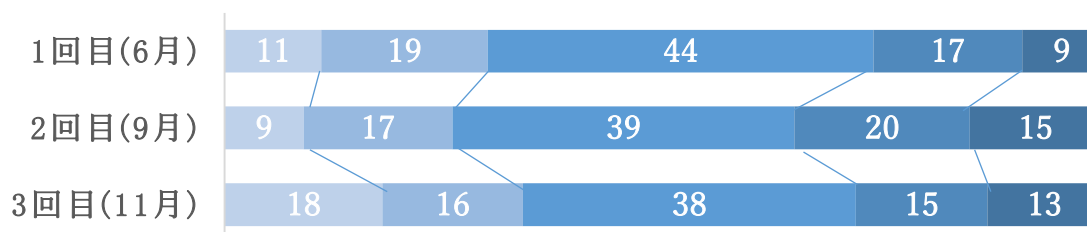
⑥ 勉強は役に立つ

■ 1.思わない ■ 2.あまり ■ 3.ふつう ■ 4.まあまあ ■ 5.思う



⑦タブレット端末学習は楽しい

■ 1.楽しくない ■ 2.あんまり ■ 3.ふつう ■ 4.まあまあ ■ 5.楽しい



(エ) タブレット端末・モバイル学習教材を活用した取組に関する意識調査

今後の研究の参考とするため、タブレット端末を活用した取組について、以下の項目でアンケートを行った。アンケートは2択とし、回答の理由を記述させた。質問項目は6項目とし、問題内容、導入時間、友人との関係性や環境などを尋ねた。

問題内容などについては、個人の課題に取り組めるので「簡単であった」と答える生徒と、「難しい」と答えた生徒に分かれた。後者は、より高度な問題に挑戦できるので、学習に対する意欲の高まりを見せる生徒もいた。タブレット端末を活用した授業では、今回各授業担当者に一任する形であるが、生徒の学習への意欲や授業などへの集中力から、約10分程度取り組みが妥当であると考えられる。タブレットを活用したモバイル学習教材に、一斉授業から短時間個別学習に向き合うことで生徒は、気持ちが切り替わり集中できる時間を過ごせたようである。

また、タブレット端末やモバイル学習教材は、短時間に解答が得られること、間違いがあっても、教員の解説を待つ時間が少ないなどの理由でメリットとして掲げた生徒もいた。一斉授業での目標でなく、生徒個人が取り組むべき学習内容や課題が明確であるから、他人との比較ではなく、より高次に向かう学習能力や姿勢、集中力につながっていく結果なのではないかと考える。

キ 事例研究

以下の2事例から、「ICT機器を活用した学習支援」の学習効果を考察する。また、この2事例を通して、「ICT機器を活用した学習支援」全体への考察になればと考える。

(ア) 事例研究1 学習に興味なかった生徒F

中学3年生の時に不登校を経験しているが、それまでの学校生活では幾人かの友人と楽しく学校生活を過ごしていた。しかし、学習に苦手意識があり、勉強に興味をもてなかった。好きなことは、アニメを見たり、ゲームをしたりすることで、将来これらの分野の職業に就きたいと考えている。本校への入学は、不登校を経験したこと、姉が私立学校に通っていたので、親にこれ以上負担をかけられないことを理由としてあげている。また、自分自身へ登校を強いることや学習をきっちりこなすことなどの精神的な負荷がかからないよう、自由度の高い学校として本校を選択した。

a 生徒Fのモバイル学習教材の取組

タブレット端末・モバイル学習教材を活用した学習に興味を示し、高いモチベーションで取り組む様子が見られた。当初、苦手意識があった数学の問題に対しても、取り組んでいく間に学習意欲が高

まってきたようであった。計算問題に興味がわき、計算用紙を教員が渡しても、「暗算を鍛えたい。」と紙に計算式を書かず、手指を動かし頭の中で計算をする素振りを見せていた。

図 11 生徒 F の学習時の感想

分からない漢字が二つあったしすぐに答えられないものもあっていつも勉強になった。
数学はよく問題を見ないとまちがえてしまうのでしゅちゅできる。

質問「今回の目標ポイントを達成できましたか？」 できた、あと少し、まだまだ、

感想→ 連立方程式の解き方はしっかりと分かったのでいい気分かと思ってもはじめるのは難しい。

また、数学の授業中に、連立方程式の解き方に言及することが何度かあった。感想の中にも「連立方程式」の単語の記述が多かったので、生徒 F のつまずきはここにあると考えた。授業担当者も、この単元を学習するよう机間巡視の際、簡単にポイントを伝えたり、個別に解法を廊下で指導したりもした。粘り強く学習を継続するうちに、生徒 F は、連立方程式の解法を身に付けたが、学習後の感想には「まだまだ」との記述が見られるなど、学習に対する意欲の高まりが見られるようになってきた。

b 取組後の変化

廊下ですれ違う際に生徒 F は、「先生、次のビットキャンパスタッチはいつですか。」と授業担当者に声をかけてくるようになった。モバイル学習教材での学習は、一斉授業とは異なり、友人らの目を気にせずに、自分の目標にあった課題を自分のペースで学習を進められ、その結果、ポイント（目標値）に到達できるという達成感を得られることが、生徒 F の学習への動機付けにとって大変効果的であった。これまで、学習に興味をもてなかった生徒 F が、モバイル学習教材への取組をきっかけに学習に取り組むようになり、自らに自信をもてるようになったことは、大きな成果である。

(イ) 事例研究 2 自信がなかった生徒 G

中学 1 年生の時に、友人関係の悪化と学校への不信により登校できない状況となった。家庭で学習を続け、本校に入学した。面談時の話において、学習の遅れと、登校できなくなったことは、自分に責任があると言い、自己肯定感が低い状態であった。何事に対しても自信がなく、「僕にはできません。」というのが口癖であったが、入学を機に自分を変えたいという思いをもっていた。

a 生徒 G のモバイル学習教材の取組

取組を進めるにつれて、学習へのモチベーションが高まっていく様子が顕著にうかがえた。各教科の担当教員からも、意欲をもち集中して学習に取り組んでいる報告があった。生徒 G においても、目標ポイントに達成することが、学習への最初の動機付けとなっていた。目標を達成するために学習を継続することで、数学を中心とした基礎学力が向上し、それが生徒 G の自信を回復させる結果につながった。

図 12 生徒 G の学習時の感想

質問「今回の目標ポイントを達成できましたか？」 できた、あと少し、まだまだ、
感想→ ⑤ 数分解のやり方が改めて理解できてよかった

質問「今回の目標ポイントを達成できましたか？」 できた、あと少し、まだまだ、
感想→ 少し前回より難しく感じていたけれど
目標ポイントに達成できてよかったです。

b 取組後の変化

継続した取組の結果、基礎学力の向上から自信が付き、「入学当初はできなかった中学 3 年生の問題にも取り組めるようになった。」と生徒 G が話した。また、学習への前向きな取組に加えて、学習以外の面においても積極的に向きあえるようになったようである。基礎学力が身に付いた生徒 G は、授業中に、分からない友人に勉強を教えるようになり、特に数学の時間には仲間の中心になった。回答したアンケートを見ながら生徒 G に進路についての話を聞くと、「うっすら進路はどうしようかと考えていましたが、勉強するのが楽しくなったので、やっぱり大学進学をしたいです。」といきいきとした表情で答えてくれた。

図 13 生徒 G の取組全体を通しての進路に向けての感想

○取り組みを通して、大学への進学など自身の進路について考えるようになりましたか。
【具体的に書いてください。】 (考えるようになった・考えなかった)
色々な考えでしたが更に考えるようになったと思います。

(2) 「ICT機器を活用した学習支援」の成果

本研究においては、1人1台のタブレット端末を活用して、基礎学力の向上及びそれに伴う自己肯定感の向上をねらいとした学習支援に取り組んだ。以下、本研究の成果について述べる。

まず、タブレット端末・モバイル学習教材の活用により、生徒が主体的に、集中して学習へ望むようになったことが成果として挙げられる。この点について、文部科学省では「ICT教育は、子ども達の学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子ども達の主体的・協働的な学び(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)を実現する上で効果的である。」としている。本研究では、対象生徒が日常

的にゲームやインターネット環境を利用している点に着目し、直観的に操作できる学習ツールとして、タブレット端末及びモバイル学習教材を選定・活用したことが、初期段階での学習への動機付けとして非常に有効であった。また、生徒の前向きな学習姿勢は、研究期間において継続して見られ、アンケート調査の諸項目の結果においても、ICT機器を活用した学習が、生徒のモチベーションの維持に大いに影響を与えていることが判明した。

次に、ICT機器を活用した授業を継続することにより、生徒の基礎学力に改善傾向が見られたことが挙げられる。タブレット端末の活用に生徒の学習意欲を高める効果が見られた点は先に述べたとおりであるが、この学習を約半年間、生徒のモチベーションを継続させながら反復して取り組むことで、本校生徒が苦手とする数学（算数）及び国語の基礎学力が向上するという学習成果が得られた点は、本研究における大きな成果である。研究の初期においては、生徒がもつICT教育への興味・関心により自ずと学習意欲の高まりが見られたが、研究を進める中で、モバイル学習教材がもつポイント機能が、生徒の学習に対する外発的動機付けに大きく影響を与えていることが明らかとなった。このことを踏まえ、本研究では、正答により獲得できるポイントを達成目標と見立て、教員がモバイル学習教材に蓄積されたデータなどから生徒個人の学習到達度に合った目標設定を行い、生徒がその目標に沿って学習に取り組むことができる「個に応じた学習」システムを作り上げた。このような学習を継続することで、生徒は、到達可能な目標に挑戦し、実際に目標を達成した成功体験を積み重ねることで、自らの学習へのつまづきを解消するとともに、学習への内発的動機付けを高め、学習に対する肯定的な感情を形成することができるようになった。

最後に、本研究の目標である自己肯定感の高まりにおいて一定の成果が見られたことが挙げられる。この点については、本研究で実施した「学習意欲に関する調査」の学習することへの意義に対する質問項目（⑥「勉強すれば、将来、何かの役に立つと思う。」）の肯定的回答が、研究後に増加した点に大きな成果を見いだせる。この調査結果から、タブレット端末を用いたモバイル学習教材による学習を、単に「楽しい」と感じていた生徒が、継続的な学習の取組により、学習すること自体を「自己にとって意味のあるものである。」と意識を変化させたことは、これまで仕方なくやらされていた学習に対し、生徒が自らの将来を考え、学習に対し各自の意味付けができるようになったと推察できる。また、生徒F及び生徒Gの2事例に見られるように、入学までの過程で、学校生活につまづき、学習への不安や不満、ネガティブなイメージをもっていた生徒が、モバイル学習教材の基礎学習に継続的に取り組むことで成績が向上したり、分からなかった学習の理解が進んだりする。学習が理解できることで、学校生活への不安の解消となる。このように、基礎学習の向上により高校の授業の理解も進んでくると、「自分達でも学習ができるんだ。」といった成功体験の積み重ねが、自らの自信につながっているようである。この自信こそが、今後社会に出ていく上での前向きな姿勢、自己肯定感や自尊感情を形成するきっかけとなっていると考える。

（3）「通級による指導」

昨年度の対象生徒6名から16名と大幅に増えた。理由は2つ考えられる。1つは、昨年度入学した生徒の中に発達障害の診断のある生徒や顕著な傾向を持っている生徒がこれまでよりも多くいたことである。もう一つは、平成30年度の試行から1年半の取組を通して、教員向けの通信「社会生活だより」を定期的に発行し、「通級による指導」の全時間指導案を作成し、いつでも教員に参観してもら

える環境を整えたことにより、本校で「通級による指導」の有効性を広く浸透させることができたからである。

今後さらに対象生徒が増加することが予想され、人的配置や時間割編成などでも増加した生徒数に対応できない可能性もあるので、今年度は初めて1対1の個別指導ではなく、1対複数人での少人数指導を試みた。

ア 対象生徒

2年次8名、3年次5名、4年次3名(ASDの診断あり4名、ADHDの診断あり3名、ASDとADHDともに診断あり2名、ASD傾向6名、ADHD傾向1名)の計16名である。

昨年度から継続指導しているのは3年次1名、4年次2名である。昨年度同様、どの生徒にも共通しているのは、これまでの失敗経験から自己肯定感が低く、自尊感情も低い。各担任には令和元年度に作成したチェックリストの該当欄にチェックをしてもらい、それを通級担当者が生徒の実態把握を行った。チェックリストの該当項目やそのつまずきの要因を基に個別の指導計画を作成した。個別の指導計画の目標を大きく分類すると、「心理的な安定」4名、「自己理解」2名、「コミュニケーション力の向上」6名、「自己管理」4名となっている。

イ 学習内容

卒業年次の3名の個別の指導計画の目標は、それぞれ「自己管理」1名、「コミュニケーション力の向上」2名であるが、全員が就職希望で指導内容が重複すると考え、生徒3名に対して教員1名の少人数指導を行った。

前期の学習内容は、就職試験で必須の自己アピール文を題材にして今までの人生を振り返り、自分の長所を考えさせた。自尊感情や自己肯定感の低い生徒達なので、全く自分の長所を言うことはできなかった。そこで、自己評価ではなく他者評価を取り入れ、これまでに言われたことのあるいい言葉を「自分の良さに気づく言葉の一覧表」から選び、そのときの状況を思い出させた。すると、全員いくつものいい言葉とそのエピソードを思い出すことができた。それらを思い出して記入しているときの生徒達の表情や、エピソードを話しているときの声が自信に満ちあふれていた。また、本校では「通級による指導」を単位認定し、調査書に「自立活動」の修得単位数が載ることから、就職の面接に向けて「自立活動」について説明やアピールできるように考えさせた。生徒個々に具体的な内容は異なるが、「自分の苦手なことができるようになった。」という意見が全員から出てきたので、その通りの内容を面接で話すように指導した。

後期には自分の特技を活かした発表「MY TIME」の内容を自分で考え、必要に応じて教員の手助けを求めさせながら、すべて自分で用意していく学習を進めており、最後の授業時間に20～30分程度で発表した。

その他の生徒に対しては、昨年度と同様に、個別の指導計画とシラバスを基に個々の教育ニーズに合わせた内容を取り入れ個別指導を行っている。「心理的な安定」を目標としている生徒には、前回の授業からの生活を振り返り、困ったことや悩みなどを聞き出し、その時々への対応方法について一緒に考えている。「自己理解」を目標としている生徒には、その生徒の得意なことを中心に内容を精選し、褒めながら苦手なことにチャレンジさせて自分ができることとできないこと、得意なことと苦手なことに自分で気付くことができるようにしている。コミュニケーション力の向上を目標としている生徒には、「こんなときどうする？」と状況別に適切な対応や言動を考えさせている。「自己管理」

を目標としている生徒には、スケジュール管理や金銭管理について手帳やスマホアプリを活用して自己管理が自分でできるようにしている。

そして、今年度も昨年度と同様に気持ちの変化に自ら気づき、自分の気持ちを整理できるようになるために、授業の開始時と終了時に生徒自身が「今のこころの状況」を1～5段階で評価するとともに「今日の授業の感想」を書くようにした。

ウ 事例研究

(ア) 3年次 生徒H (ASD傾向)

生徒Hは今年度から「通級による指導」を受けている。今年度、卒業予定生徒なので集団指導（授業名はライフマネジメント）で指導している。担任が付けたチェックリストのつまずきの要因を基に実態把握を行った結果、最もチェックの多かったコミュニケーション力を主たる課題として設定し、個別の指導計画の目標を「適切なコミュニケーション力を身に付ける。」とした。また、チェックリストの最も多いつまずきの要因が「メタ認知」であった。入学当初から自分を大きく見せようと嘘をついたり、強がったりしていた。また、自分の苦手なことやできないことを知られないような言動を繰り返してきたため、友人とトラブルになったこともあった。したがって、授業では、コミュニケーション力を目標にしながらも、メタ認知の向上も考えた。

自己アピール文を考える学習では、自分の長所を考えさせたが、いくら待っても自分から長所を言えず、「長所はないですね。」と繰り返していた。そこで「自分の良さに気づく言葉一覧表」を使って今までに言われたことのある言葉にチェックを付けさせた。

図14 プリント教材

~自分の良さに気づく言葉一覧表~ 6月17日 クラス _____ 名前 _____

◎友達や他人から言われた言葉にチェックを入れましょう。

<input type="checkbox"/> やさしい	<input type="checkbox"/> あかるい	<input type="checkbox"/> おもしろい	<input checked="" type="checkbox"/> 親切
<input type="checkbox"/> 勇気がある	<input type="checkbox"/> 頼りになる	<input type="checkbox"/> 勉強ができる	<input type="checkbox"/> ユニーク
<input type="checkbox"/> まじめ	<input checked="" type="checkbox"/> 正直	<input type="checkbox"/> 元気がある	<input type="checkbox"/> がんばりや
<input type="checkbox"/> 聞き上手	<input type="checkbox"/> はきはきしている	<input type="checkbox"/> がまん強い	<input type="checkbox"/> 笑顔がいい
<input type="checkbox"/> リーダー的	<input type="checkbox"/> 素直	<input type="checkbox"/> 思いやりがある	<input type="checkbox"/> おだやか
<input type="checkbox"/> 誠実	<input type="checkbox"/> 清潔	<input type="checkbox"/> 積極的	<input checked="" type="checkbox"/> 健康的
<input type="checkbox"/> 活発	<input type="checkbox"/> 社交的	<input type="checkbox"/> 情熱的	<input type="checkbox"/> 理解力がある
<input type="checkbox"/> 信用できる	<input type="checkbox"/> 心が広い	<input type="checkbox"/> 責任感が強い	<input checked="" type="checkbox"/> 決断力がある
<input checked="" type="checkbox"/> 礼儀正しい	<input type="checkbox"/> 几帳面	<input type="checkbox"/> たくましい	<input type="checkbox"/> 相談できる
<input type="checkbox"/> あきらめない	<input type="checkbox"/> センスがいい	<input type="checkbox"/> 運動が得意	<input checked="" type="checkbox"/> 手先が器用

そして、その今までに言われたことのある言葉それぞれについて、5W1Hを中心にできるだけ具体的に思い出させた。幼稚園、小学校低学年、高校のエピソードが多いことから、生徒Hは小学校高学年から中学校まで褒められるようないい言葉を言われていないか、言われていたとしてもそれ以上の悪い思い出があり、その期間は良い印象がないのではないかと考えられる。実際、中学校ではクラ

スに居場所がなく、特別支援学級、「通級による指導」の教室、生徒会室などにいることが多くあり、主に教員や上級生とばかり話していたと聞いている。

翌週、自己アピール文を作るためにこの中から2つを選ばせると、「優しい」と、ここにはない「清潔」を選んだ。「清潔」は前日に言われた言葉で、他の生徒を待っている時に教室の掃除をしていて教員に言われた言葉だった。その前日のことを話している表情は非常に満足そうだった。

そして、前期末の三者懇談で進路の話になり、かねてから希望していた小説家になるための専門学校への進学と小説家は趣味程度にしておいて就職することについて話をし、就職の方向で話を終えた。懇談の最後には、就職する前に高等技術専門学校という選択肢もあることを担任から聞かされていた。後期が始めるとすぐに担任の元へ行き「就職してやっていく自信がないから高等技術専門学校へ進学したい。」と入学以降初めて弱気な言葉を発した。そのときの表情が強気だったので、担任は喜んで通級担当者の元へ来て「通級による指導」のおかげで初め

て自分の弱さを見せてくれました。そして、それを受け入れた上できちんと自分の進路を選択することができました。今までの生徒Hならきっと『先生が勧めてくれたので・・・そのまま就職でもいいんですよ。でも・・・』という表現をしていたはずですよ。おそらく別の部分で自信がついたのでしょう。この部分は弱さを見せても大丈夫だという安心感があったのでしょう。」と言っていた。担任が言ったように、生徒Hは「通級による指導」で毎週2時間褒められ続けることで自尊感情や自己肯定感が徐々に醸成され、自分の弱さを見せることができたと考えられる。

図 15 プリント教材

いい言葉とそのエピソードのまとめ

クラス _____ 番号 _____ 名前 _____

いい言葉	エピソード
健康的	学校の健康検診で言われました。
決断力がある	ライフマネージメントのジュンガをやったときに言われました。
筆が器用	絵が得意だからおもしろい絵を作ったときに先生から言われました。
正直	高のときに中間テストで先生のまらがいと言ったときです。
あかるい	小学1年の思ひを上げ、先生に言われました。
優しい	小学2年のころ、いかりの子がケンブリを下にさせたので、あんなときに言われました。
あまねがり	友達にケージをしていてさしづのさいごまであいてをこうけさしたのと言われました。
がまん強い	小学3年のころ、おうしをうた本をしたが、泣かなくなったので言われました。

(イ) 3年次 生徒 I (ADHDとASDの診断あり)

生徒 I は、中学校で通常学級に在籍していたが個別の教育支援計画を引き継いでいる。個別の教育支援計画の目標には「忘れ物をしない」や「定められた時間を守る」などの自己管理を中心に設定されていた。本校入学後は特別支援教育対象生徒として個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、担任が各教科担当と連携しながら「忘れ物をしない」や「定められた時間を守る」を目標として指導を進めてきた。生徒 I は、分け隔てなく誰にでもやさしくすることができ、おおらかな性格であり、コミュニケーション力が高いため、入学当初から1年間は同じクラスの周りの生徒が朝からモーニングコールをしたり、授業中の提出物を一緒にしたりしてサポートしてくれていた。しかし、2年次からは選択科目が大幅に増え、同じクラスの生徒と関わるのが減ったため、周りの生徒のサポートを受けにくくなった。すると、遅刻や欠席が増え、授業中の提出物も完成できないことが増えてきた。そこで、授業中の提出物については教科担当と連携し、細やかな声掛けをしてもらうことで何とか提出物を完成させることができるようになった。遅刻や欠席については家庭と連携し、朝の目覚まし時計のセットを確認してもらうようお願いした。しかし、夜遅くまでスマートフォンでの動画閲覧や、ゲームをして寝る時間が3時や4時になることも多く、さらに保護者が生徒よりも早く家を出るため、生徒が二度寝をして遅刻や欠席をしてしまうことがしばしばあり、大きな改善には至らなかった。そこで、担任が自己管理面の改善を期待して「通級による指導」を勧め、今年度から受講することになった。

担任が作成したチェックリストには、多岐にわたる項目にチェックがついていたが、まずは学校生活をスムーズにするために必要な自己管理の改善を図ることにした。したがって、「通級による指導」の個別の指導計画の目標には、「スケジュールや持ち物の自己管理ができるようになる。」とした。

初回の授業で、「通級による指導」でどのような授業をしたいのかを話していると「授業内容の一覧はないですか。」と尋ねられた。令和元年度に作成したシラバスは教員用のものだったが、それを見ながら授業内容を一緒に考えた。その結果、再度本人からスケジュールをよく忘れることと、毎日の歯磨きなども忘れることがあるので、それらを改善したいとの訴えがあった。また、コンビニで多額の買い物をするなど、金銭管理についても課題があることが分かった。そして、スマートフォンの依存度が高く、少しの空き時間でもスマートフォンを触ってしまうことも自分で認識していた。

そこで、肌身離さず持っているスマートフォンを活用した自己管理を提案した。持ち物の忘れ物はリマインダーアプリを、起床時間や家を出る時間などの時間管理はアラームアプリを、アルバイトや学校の前日などの長期間に渡る予定はスケジュールアプリを活用することを提案した。どれも生徒自身では活用しようと思ったことがなく、活用してみるとかなりの手応えがあったようだ。特に、アラームアプリとスケジュールアプリは有効だったようで、アラームアプリは起床時間や家を出る時間だけでなく、歯磨きや持ち物を確認するなど生活の中で生徒 I が忘れがちな事柄にもアラームを活用することで、スムーズに生活できるようになった。また、スケジュールアプリには学校の行事や時間割、アルバイトの予定、プライベートの予定を入力しておくことで、自分がいつどのような行動をとればいいのかを見通すことができるようになり、スケジュールの勘違いや時間の間違いがほとんどなくなった。また、金銭管理については、毎回の授業で、前回の授業からその日までに購入したものを書き出した。始めのうちは、それらがその時にどの程度必要だったのかを振り返り、今考えるとどの程度必要だったのかを考えさせた。すると、その時はどうしても必要なように感じていたが、振り返ると別に無くてもいいようなものを多く買っていることが分かってきた。そのため、なかなかお金が貯ま

らず、以前から買いたいと思っているものをなかなか買うことができなかつたので、リマインダーアプリを利用して欲しいものリストを作成し、上からほしい順に並べ替えるようにした。そして、買いたいものが出てきたときは、そのリストの中の何番目なのかを毎回確認するように指導した。すると、購入をためらうことが増え、少しずつ無駄遣いが減っていった。

また、奈良県教育委員会が Google 社と契約した G suite for Education の機能を活用し、毎日の学校生活の様子をフォームに入力して返信させた。フォームでは選択肢を用意し、その内容に応じて毎日点数が出るようにした。更に、毎日フォームを入力して送信することで毎日自分の行動を客観視させ、翌日以降の学校生活の改善に活かしてもらうこともねらいとした。また、通級担当者が毎日の様子を知ることで、次回の授業内容に活用した。これを毎日繰り返しながら声をかけ続けていくことで出席状況は改善し、課題を少しずつ克服している。

図 16 行動観察チェックフォーム

授業中のチェックシート

フォームの説明

このフォームでは奈良県教育委員会のユーザーのメールアドレスが自動的に収集されます。 [設定を変更](#)

月曜日 (3・4限 体育)

	3・4限 (体育)
出席した	<input type="checkbox"/>
遅刻しなかった	<input type="checkbox"/>
提出物を出した	<input type="checkbox"/>
プリントやノートを書いた	<input type="checkbox"/>

小学校のときから自己管理について改善するように継続指導され、時間管理については時計、プリント類についてはファイル、スケジュールについては手帳と様々な種類に分けて活用してきたようである。しかし、生徒 I は様々なものを使い分けることができにくく、生活の改善には至らなかったと思われる。スマートフォンは毎日使用するものであることと、スマートフォンに全ての役割をもたせることで使い分けの煩雑さがなくなり、非常に効果的であった。

エ 成果

「通級による指導」を受講した生徒や保護者に対し、アンケートを実施した。生徒からは次のような回答が得られた。

①「通級による指導」を受けて役に立ったと思った内容は何ですか。

- ・ 相手に分かるように説明すること。
- ・ リラックスや気持ちを落ち着ける方法。
- ・ 自分の苦手なことを克服する授業内容全て。

②「通級による指導」を今後受ける生徒に対して、何かアドバイスはありますか。

- ・ 間違いなく自分のレベルアップにつながる良い授業なので、ぜひ受けたほうがいいです。
- ・ 何事も前向きに頑張ろう。
- ・ 授業を受けたら苦手だった部分が苦手でなくなり、得意な部分を新しく見付けることができるので、ぜひ受けるべき。

また、卒業年次の保護者にもアンケートを行った。

③「通級による指導」についての感想や意見があればお願いします。

- ・ 「通級による指導」で学んだことを今後、社会に出てからも実践できるようになってもらいたいです。
- ・ 何を伝えたいのか、どのようなことを聞いてほしいのかが分かりやすくなりました。
- ・ 明るく社交的になりました。
- ・ 子どもの知らない先生からも声を掛けられることが増え、とても喜んでいます。
- ・ 「通級による指導」の話聞いたときには「少しでも子どもにとってプラスになるのであれば」と思いお願いしましたが、少しどころが大変プラスになっているなど感じました。

これらのことから、生徒の課題はそれぞれ異なるが、生徒自身も周りの人も成長を実感できる取組であることが分かる。

また、本校では、多くの教員が生徒の観察のために休み時間や昼休みに校内を巡回しており、通級担当者も同じように巡回している。生徒の中には、一人で塞ぎ込んでいる生徒や一人で時間を持て余している生徒がおり、それらの生徒に声を掛け、話をしていると自分の悩みなどを話すことがある。その話の中で自尊感情や自己肯定感の低さを感じると、必要に応じて「通級による指導」の一部分を実践することも今年度は試みた。その結果、「通級による指導」を受けていない生徒に対する指導の効果がとても高いことに驚いた。たった 20 分程度の指導にも関わらず、指導後に感想を聞くと生徒自身が大きな変化を感じ、翌日から生き生きと登校して授業に参加することができた。すなわち、自尊感情や自己肯定感の低い生徒に対して、それらを向上させる指導内容は、「通級による指導」の中だけで完結してはいけない。これらの取組を広く他の生徒にも実践してこそ大きな成果を得られることが分かった。さらに、「通級による指導」を通し、本研究において今後一層充実した取組となるために次のものを作成した。

(ア) 高等学校における「通級による指導」手引書

本校の体制や取組を詳細に記したものを作成した。内容は Q & A 方式にし、目次に Q を示すことで知りたい情報をすぐに調べられるように工夫した。今後、本校で「通級による指導」を担当する教員に活用していく予定である。

(イ) 生徒の実態把握のためのチェックリスト

「通級による指導」を受ける生徒の実態把握を短時間で的確にできることを考えて作成した。さらに、生徒の課題に応じた内容を指導できるようにシラバスとも連動させ、授業担当者が授業内容をスムーズに考えることができるように工夫した。また、今年度実際に活用してみると、情報量が多すぎてパソコン画面をスクロールしなければ必要な情報を見ることができなかったが、Microsoft Office の Excel のマクロを使うことで、必要な項目だけを画面に表示できるようにした。これにより「通級による指導」を受けない生徒に対してや特別支援教育の専門的知識がなくても生徒の実態把握が容易にできるようにチェックを付けやすくするとともに、必要な情報だけを得ることができるようになった。

(手引書の添付資料4)

(ウ) 「通級による指導」シラバス

令和元年度は、これまでに実践した指導内容を授業担当者が替わっても指導できるように教員用に作成したが、今年度、生徒と課題を共有し、授業内容を一緒に考えることで指導の効果が一層高まることを感じたため、指導の中で生徒自らが課題を感じ、改善・克服を希望したときに、生徒自らが授業内容を選択できるように一覧表を生徒目線で作成した。それぞれの取組を説明したものについては、指導の目的や概要等を入れ、教員が指導に当たり参考になるようにした。(手引書の添付資料5、6)

令和2年	4月9日	木	通級推進委員会
	5月18日	月	学校教育課による授業視察・事業打合せ
	5月27日	水	文部科学省と奈良県教育委員会による事業の委託契約決済承諾(決定通知)
	6月1日	月	本事業使用ソフト会社との契約、支援アドバイザーの決定(継続)
	6月17日	水	学校教育課による授業視察・事業打合せ
	6月26日	金	特別支援教育推進室との事業打合せ
	6月30日	火	校内にて事業のための「ICT 拡大委員会」
	7月9日	木	特別支援教育推進室による授業視察
	7月16日	木	学校教育課による授業視察・事業打合せ
	7月22日	水	特別支援教育推進室による授業視察
	7月27日	月	学校教育課による授業視察・事業打合せ
	7月30日	木	特別支援教育推進室との事業打合せ
	8月3日	月	学校教育課との事業打合せ
	8月19日	水	「事業」第1回検討会議
	11月12日	木	奈良大学 古川先生による「社会生活」の授業視察と指導助言
	11月20日	金	奈良大学 古川先生による指導助言
11月24日	火	畿央大学 西端教授による指導助言	
12月8日	火	「事業」第2回検討会議	

表9 本研究における研究計画(令和2年度)

6 今後に向けての課題

(1) 「ICT機器を活用した学習支援」

ア 生徒とICT教育

生徒がタブレット端末を用いたモバイル学習教材に向き合い、生徒個人の基礎学習課題に合う「個別の課題学習」を続けた結果、生徒全般に基礎学力の向上傾向が見られた。学校生活への不安や学校への不信から不登校を経験した生徒もいる中、生徒自身も学習への苦手意識や勉強の遅れを取り戻そうとする姿勢が、モバイル学習教材と一致したことも功を奏した。モバイル学習教材を活用したことで、教員と生徒間でのマイナス要素が減少し、生徒は失敗することを恐れず、モバイル学習教材の中で修正、理解することができたと考える。短期間ではあったが、つまづきが見られる課題を反復学習することにより、習得できるようになった生徒が多かった。反復学習を継続するために、具体的な学習到達目標を明確な数字で生徒に提示すること、取り組むべき課題を端的に伝えることで、意欲的に学習をする姿をみることができた。

基礎学力が向上することにより、学習に対する不安感や学校に対する抵抗感等が減少していると考えられる。生徒が基礎学力を向上させることを、授業の中で短時間でも、モバイル学習教材に向き合い、努力したことによってできたことと体感することが必要であった。その学習に向かう姿勢が、学校の成績を向上させたい意欲に結び付いているようである。個別アンケートの結果からも、生徒の中には、大学進学をより意識するようになったことや、進路を深く考えるようになったことが効果であったと考える。ただ、タブレット端末での学習に対しての不満感や集中できづらい生徒にとって、効果があるからと、すべての授業や学習時間を費やすことはできない。本研究のように、1時間の学習内容で、10分程度の短時間の導入やどの場面でどの程度を取り入れるか、個々の生徒やその集団のあり方を見ながら臨機応変に対応をしていくことがより高い学習効果を生むと考える。そして、これからの多様な学習形態や、多様な学習ニーズを必要とする生徒達に向けて、学校自体、そして、授業の在り方を変えていかなければならない時期が到来しているのかも知れない。

また、「ICT 機器を活用した学習支援」では、障害のある生徒だけでなく、対人関係を築くのが苦手な生徒に対しても、支援のツールとして今後の活用が望まれる。学習の補助や支援だけでなく、学習に気持ちを向けさせるためには、ICT機器のような多彩な学習コンテンツも望まれる。しかし、ICT機器だけで十分な役割は果たせず、それを媒体とし、教員や友人の支えが必要となってくると考える。今後もICT機器やモバイル学習教材を活用しながら、生徒への学習意欲を高める支援方法や確かな基礎学力を定着させ、自尊感情や自己肯定感をより高めていく学習内容、授業づくりを目指したい。

イ 学力の向上と自尊感情

「ICT 機器を活用した学習支援」した基礎学力の向上で自信を付け、自己肯定感や自尊感情を高める取り組みには、生徒個人への具体的な賞賛を行う技法が多く紹介されている。また、教員に対する不信感や学習に苦手意識を持つ生徒にとっては、教員からの過度な賞賛や細やかな手立てが学習への障壁になり得る可能性がある。本研究のように、基礎学力の定着を目指し、「ICT 機器を活用した学習支援」を継続的に取り組むことにより、生徒自身が体感として達成感や満足感を得られた時にこそ、今までに得られなかったような自信につながるのではないかと考える。本研究では、内面的な充実感や達成感を高め、自信や自尊感情の高まりにつなげることを、「ICT 機器を活用した学習支援」による基礎学力の向上としたが、それが、基礎学力にこだわらないものもあってよいと考える。

ウ ICT機器を安全にスムーズに使うための環境整備

ICT機器を購入しただけでは、ICT教育の効果は享受できない。どのように授業に取り入れるのかを明確にし、機器の選定や台数の算出、導入スケジュールなど具体化する必要がある。長期間導入することを考え、「ICT機器を活用した学習支援」の運用面をしっかりと検討しておく必要がある。そのため組織づくりと、定期的な効果と検証を行う機会をもつ。また、対面による指導に頼るばかりでなく、遠隔授業を意識した取組やICT機器を活用した共同的な学びの機会を多く持つなどの授業研究にも力を入れていきたい。

人間関係の形成に苦手意識をもつ生徒にとって、ICT機器の有効に活用することで、自分の意見を表現することができたり、他人の意見に気持ちを寄せたりすることでの共同的な学びが実現できる。一斉授業などの学びの形式から、自らがタブレット端末・モバイル学習教材に向き合い、個別に合う課題に取り組んだり、タブレット端末を通じてクラスメートと意見の交換を行ったりと能動的な学びやより深く高まりのある授業づくりをしなければならない。

(2) 「通級による指導」

特別支援学校と兼務する教員が専任として本校の「通級による指導」に携わり、この教員が特別支援教育における豊富な経験と高い専門性で「通級による指導」が前向きに進んでいるのが実情である。今後の「通級による指導」の発展や拡充を考えると、授業担当者を増やしていくことが必要不可欠である。

「通級による指導」は特別支援学校の自立活動に相当する指導を行うため、特別支援学校（養護学校）教員免許状をもつ教員であれば比較的指導しやすいが、高等学校における「通級による指導」に必要な免許状は高等学校教員免許状である。したがって、誰もが簡単に通級担当者になれるわけではない。今後は、その人材育成システムの構築が必要であり、そのために「高等学校における『通級による指導』手引書」を活用したい。

また、令和2年度の成果にある通り、自尊感情や自己肯定感を向上させる指導は「通級による指導」だけで終わらせてはいけない。広く他の生徒達にも行うことで一層大きな成果となるので、「通級による指導」の指導内容を職員研修等で全生徒に対して実践できるようにしていかなければならない。そのために今後は職員研修を通じて3つの成果物「高等学校における『通級による指導』手引書」、「生徒の実態把握のためのチェックリスト」、「『通級による指導』シラバス」がいつでも、どこでも、誰でも活用できるように更なる改善をしていかなければならない。

7 おわりに

自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上」にもあるように、「勉強やスポーツなどを通じて他者と競いあうこと」や「自分の力の向上に向けて努力すること」が求められる社会で、このような機会を持たずに、高校に進学してきた生徒に対し、いかにして自己肯定感を培い、自尊感情を育みながら、他者と競い合う社会に送り出すかを教員や保護者、地域リソースが一体化し、その方策をこれからも考え続けなければならないと考える。

ウィズコロナの社会は、今までの常識では測れない多様性のある社会となると予測する。教育現場も、目標は一つでも、その手段は多岐にわたる多様性の取捨選択できる現場になっていくと考える。

I C T機器の活用がさらに進化し、他者との関り、「コミュニケーション力」も今とは違う形、手段や速さが求められ、進んでいくだろう。そのような社会を今後生き抜く未来ある子ども達に求められるのは、「創造力」であり、「人間力」であると考えている。

これからを生き抜く高校生にとって、与えられるのを待つばかりではなく、自らの力で考え、行動し、自己肯定感をもって作り出す力(創造力)や自己肯定感や自尊感情に溢れる魅力を持ち合わせ、他人との共同作業や、コミュニケーションをとる力(人間力)だと考え、今後も教育現場でより生徒のために、生徒の一助となる実践を積み重ねていきたい。